



讚歎

世尊、往昔無量劫に、勤苦して衆の徳行を修習し、我及び人天龍神王の爲にし普く一切の諸の衆生に及し給へり、能く一切の諸の捨て難き財寶妻子及び國城を捨て、法の内外に於て格む所なく、頭目髓腦悉く人に施せり、

本號目次

- 年頭の感慨
- 法華經諸異本に就て
- 日什聖人體文編諸章卷上
- 不受不施史料
- 子の法華經觀出版に就て
- 宗門の教育に就て
- 宗教を論ず
- 京都教壇論
- 小久遠陀羅尼
- 新年の語
- 雜報數件
- 廣告數件

本多日生
樹友文次郎
阪本日種
梶木日種
先更會幹事
聖峰生
勝水淳行
櫻橋生
覆面冠者
容廣坊
記者

新年の御慶

芽出度申納候

一月元旦 本多日生

新年の御慶芽出度申納候

一月吉旦

統一團

編輯局

井村成 今根成 山根成 鈴木真 笹川文 國友文 木村文 梶木文 古定賢 正種明 郎應學 道隨也

統一

年頭の感慨

本多日生

歲月流るゝが如く白頭成り易く、道念水に似て波動免れ難し、無常迅速の驚きは今更言ふも甲斐なし、唯道念微弱の一事に至りては、決して等閑に附し去るべきにあらず、年頭の感慨殊に深し、由つて自ら思惟したりし感想を記して同好の諸士に問はんとす

正法の宣傳に従ふは人生最高の淨業にして、吾人教育家の夙に自信し覺悟せる所なり、而れども宣教の決意は果して年と俱に強烈に持續し精進しつゝありや、當初炎々たる弘法の思念に驅られて、宣教の途に上りし諸士如今果して如何、宣教の途上には幾多の困難と煩悶とに逢著せしならんが、時に倦怠の心を生じ、或は全然の思念を抛棄せるもの尠からざるべし、是れ大に注意すべき現象にして、深く攻究を要する所なり、固より道念確立せずして弘法家を以て假裝せりし人の、時に宣教の淨業を抛つは、敢て佐むに足らずと雖も、當初確乎たる道念に住し、炎々たる熱誠を有せし人にして、諸種の事情に阻害せられ或は困難に仆れて空して初一念を棄つる者

あるを見ては、轉た感慨に堪へざるものなくんばあらず、由來宣教の事決して容易にあらず、就中妙法華經の大教義を提げて恐畏の世に立つは、難中の難事に屬す、古語に云ふ、王公將相として天下國家を治め、千軍萬馬を卒ふるよりも正法を宣傳するは尙至難事なりと、彼の中道に挫折する者多きは蓋し之が爲なるべし、然れども今日の宣教に志す人に就て、深き同情の念を以て更に攻究すべき事尠からざるを覺ゆるなり

如來の正教は解し難く入り難し、正法を奉ずる人は爪上の土の如し、豈多數の感化を望むべけんやと、以て自ら慰め且安心する人なきにあらず、余はこの消極的慰安を取れる人々に同意する能はざるものなり、固より自己の精力を傾倒し盡して而も感化の擧らざる時に於て、退いてこの種の慰安を取るは、一概に排斥すべきにあらざるも、未だ精力を傾倒せずし、晏然この退嬰の思想に住するは、是れ決して眞の佛子の學ぶべき所にあらず、余は寧ろ宣教の途上に煩悶して大に發揮を理想せる健兒に對して無限の同情を表するものなり、この宣教上の煩悶は即ち證法攝化の道念の發熱たるを示すものにして、この苦心の存續する所、必ず一種の光明を發見すべし、而して更に一生面を開拓して、宣教上の活路を造るに至らん、この新正面こそ四悉運用の活感化にして、活ける信仰活ける道念はこの種の苦闘より來るべし、所謂如來と共に宿

り手を以て頭を摩せらるゝの大慰安は、この間に實驗せらるべきなり、この煩悶兒は一朝活路を發見したるの時、一段熱誠を増し一層道念を高め、感化の奏効隆々たるものあるに至らん、故に余は宣教の小効蹟に安んずるなく、寧ろ遠大なる希望を懷抱し廣潤なる感化を理想して、一步一步に益々進み、決して消極的慰安に息まらざる人士を歓迎せんとす、從來吾人法師の宣教上に於ける慰藉の教訓は、社會を惡感して時は未法なり機は濁惡なり、正法正義に歸信するもの尠きの時機なり等と謂ひて、自己が宣教上に具備すべき資格、考察すべき要義を問はざるかの如き偏見を抱きたりき、この偏見の爲に自己の不備にして迂遠なる教導上の缺點を自覺するの力極めて遲鈍にして、遂に奏効を見ざるも、尙且平然として罪を社會に歸し、自ら慚憤する所なきものゝ如くなれり、是れ大なる病想なり

人尤惡なるもの尠し教ふるに道を以てして、その方法に於て適切ならんか、必ず感化の實驗を施し得べし、見よ禽獸すら尙馴養するに道を以てせば、以て之を使役し且諸種の技藝を演せしむるにあらずや、人生社會如何に溷濁に如何に墮落せりとも、豈感化の道なからんや、而して佛敎の教ふる所に依れば、萬機救濟の方便一も備らざるはなく、如何に頑愚の徒も如何に賢明の士も、この大宗教の感化に漏るべきものあることなし、只之を運用するものゝ熟すると否とに依るのみ、

漫りに迂遠の教化を施すなきを要す、この運用に留意するは極めて愉快のことにして、又之に由つて宗教感化の上に活ける生命を保有し得るものなれば、決して拘泥因循以て足れりと思ふべからず、而してこの運用を考慮するには、之を宗義と時代の思想との上に對比して、尤も心力を費すべき所なりとす

第三に自己の道念に常に生氣あらしむる事、道念は一たび確立したる後は最早之を修練するの要なしと思ふ人あらんも、是れ大なる誤解なり、縱し一旦完全なる道念を發起し得るも心は活物にして時々刻々に念々生滅するものなれば、常に生氣ある道念を保有すべく留意せずんば、前に得たる道念は日月の経過と共に知らず識らず薄らぎ行きて、遂に散滅し去るものなり、恰も食物の胃に飽滿せるも、時間の経過と共に消化し去つて又空腹となるが如し、縱し全分消滅に歸せずとすも新々加養するなくんば、その力次第に微弱となりて、感化の靈力を有するなきに至るべし、故に宣教家の尤も留意すべきは、常に道念に生氣あらしむることに在り、この道念の生氣を維持するに就ては、上に佛陀の護念を感ずる心のみに止めず、必ず自ら佛子の本分に省み、慈悲救濟の思想を發揮すべし、即ち一切道行の中心は慈悲の心に基くを思ふて、我等は慈悲の光を世に被らしむべく働くが爲に世に存するものと覺悟すべし、而してこの慈悲の動作は即菩薩行にして、こ

殊に妙法華經の如き、尤も順世的教義にして、煩惱を斷せず五欲を離れずして、而も無上の佛道に會合せしめ俗諦開會の妙談は五濁劣機を攝護して、佛知見道に來らしむ、至妙深絶の大教義なり、之が宣教に従ふ者、その感化の方法に就いて尤も多くの勞力と考察とを拂はずんばならず、況んや現代は社會の大變化に際して思想の過渡期に屬し、舊來の主義方法にして全く順應せざるもの尠からず、苟も眞實大法宣傳を以て任ずるの士は深くこゝに猛省せずんばならず

余は宣教上に就いて、宣教者の資格の修養と感化の方法とに於て、少くとも左の諸點を具備し考察すべきの必要を認むるものなり

第一宗義に精通する事、この宗義に精通するに就て、廣狹淺深の度は幾多の差違あるべしと雖も、兎も角宗義の綱領に就てその妙旨を分明に看取するを要す、この綱領を概括すること、その妙旨を把住すること、極めて重要なことにし

て曠漠たる教義煩瑣なる學說に對して、若しも概念を遣らずんば多く學び廣く見て、却て旨致に感ひ、隨つて道念の確立を妨げらるゝに至るべし、故に我奉持する所の宗義綱領は果して如何、その妙旨は果して如何と、仔細に考量して尤も正明に將た堅實に守持する所なくんばならず

第二宗義の運用に留意する事、前に陳ぶるが如く、社會の變化思想の推移に伴ふて宗義の運用に尤も多く考慮を盡すべし

に佛陀に接觸し、こゝに佛法を實行するものたるを心得、一日も慈悲の心行を散失するなきを誓ふべし、法華經は上に本佛の大慈悲を光顯し、下に佛子をして慈悲の心行を勵ましめんとして起りしものなり、故に如來室とは一切衆生の心中慈悲心是れなりと説き、一切衆生を救ふの心を發せる者此の經を得べしと教へ給ひぬ、この經を傳ふるも亦此に外ならず、此の外宣教の方法等に就て、留意すべきことは更に號を改めて記することゝなしぬ

法華諸異本に就て

國友文次郎

二、
妙法華經の支那に傳譯せられしもの前後合して六(或は五)内三本は既に武周刊定衆經目錄及び出三藏記集の背に缺けて吾人は添品を除いては僅に正妙の二本を有するに過ぎず、近來ネポールより梵本の發見せらるゝありて、少しく研究の材料を供給すと雖も、之とても時に二三の好奇心を満足せしめ得るに過ぎずして、暗黒なる印度佛敎史中に埋没せる法華傳統の歴史は、更にその材料の缺損せるが爲に層一層の暗黒を加へて、吾人は遂に何等の解決をも得る能はざらんとす、嗚呼此の如くにして吾人は永しへに法華の出現は龍宮傳來の神怪談等によりて之を説明するのみ、諸異本の相違は譯人取捨

の獨斷説によりて之に満足せざるべからざるが、大乘非佛説の主張、科學的研究の結果は、更にその鋒鏘を新にして、妙法華經の歴史に就ても聞き捨てならぬ幾多奇怪の論辯を恣にするに、吾人は遂に之に何等の酬答をも試みずして黙せざるを得ざるか

元より三世諸佛の前の法華は即今の釋尊所説の法華にして又今の釋尊所説の法華は、直ちに余輩が信する佛陀と、余輩が見たる大藏とを比況したる上に、必ず此の如き教義理想なかるべからずと推定したる余輩主觀(かゝる意味にての)の法華と、等しかるべきが故に、現存の法華經その物について、之を佛説とするも、將た之を非佛説とするも、そは何等重要な問題に非ずして、單に歴史家の閑事業のみ、少しも余輩の關知する所に非ずと雖も、而も亦能ふべくんば之が歴史を探究して、その出現と傳統との狀況を詳にしたきは余輩等法華を信する者の、無理ならぬ欲求なり、且は之によりて印度佛敎界の思想變遷史を知るに便する所頗る多く、又佛典編纂の狀態を尋ねるにも幾分の資するなきに非ず、若しそれ諸異本の同異を尋討して後代の竄入(ありとすれば)を排除し、かくて法華の根本義と及びその支末説との間に判然たる境界を畫し、以て從來理論の上より推斷せし二三の解釋に、確乎たる根礎を與へ得るの希望(たとへ僅かながらも)ありとすれば、此の如き無味乾燥の思索も亦敢て徒勞事に非ざるべし、

乞ふ先づ研究の端緒を語らん哉

三、

印度に於ける法華經史は暫く尋ねるに由なし矣、支那に入りて之が傳譯と受持との消息は、大略法華傳に盡きたれば、(二三論すべき所あれども)余輩は唯必に際して時に論辯を試むるのみに止めて、先づ現存の材料に就て直ちにその疑惑の二三を語らん

天親の法華經優婆塞舍を讀みし人は必ず心付きしならん、會て法華經の佛説を疑ひし事なかりし余輩は、その重大なる教義に於て妙本と一致せざる者あるに、頗る驚駭に堪へず、更に正本を繕き、梵本の英譯を求めて、驚きは爰に疑惑と變せざるを得ざりき、天台日蓮の議論はるの重要な一部に於て動搖を來さずや、法華經迹門の肝要たる十如是に附隨せる幾多の大議論は或は破壊せらるゝなきかと、即ち余輩は古來の解釋と、及び現代宗學者の意見とを尋ねしも、その多くは單に羅什譯經の奇跡等を固執し、正本の誤謬なりと獨斷して、僅に信仰を維持せるにすぎず、殊に甚だしきは二本(正妙)の異同を以て譯人の取捨加減にありとして、原本の相異を認めざるものすらあり(余は後に諸種の方面にもこの事を發見したり)よし妙本を信するにしても法護等の誠實を疑ふべからず(殊に梵本の發見せられしをや)正法華及び法華論の相異は果して何故に生ぜしやを尋ねるは、殊に此の如き重

大なる經文に於て大に必要なるべきに、余輩は舊習を襲つて徒に訓詁を之れ事とせる所謂宗學者なる者を捨てざるを得ざりき、文化の流は湯々として、時代の智識は日に月に新なるを、豈末書を尋ねて能事終れりとなすべけんや、議論は枝の枝に走り、研究は末の末に持ち行かれて、本經に就ては十如是に就てすら尙其の智識殆んど零なり、余輩はかくてこの研究に動機を與へられたるなり

四、

更に余輩は多くの疑問に遭到しぬ、試に二三を語らんに、釋教開元錄に曰く

妙法蓮華經提婆達多品第十二、

今編入妙法華在第五

卷二初、沙門法獻於于填國(西域地方の内にあり)得梵本一

見二道慧宋齊錄一僧祐錄云於高昌郡獲梵本一未詳孰

と、更に曰く

沙門達摩々提齊言法意西域ノ人悟物情深隨方啓諭以

武帝永明八年庚午爲沙門法獻於于揚都瓦官寺譯提婆達

多品等二部一獻時爲僧正初一獻以宋元徽三年遊歷西

域於于填國一得經梵本及佛牙有迦毗羅神衛護還宋

經至齊永明中其沙門法意譯出云々

と、出三藏記集を見るに

妙法蓮華經提婆達多品第十二、

觀世音懺悔除罪咒經一、 永明八年十二月十五日譯出

右二部凡二卷、齊武帝時先師獻正遊西域於于填國一得觀世音懺悔除罪咒經胡本一還京師一請瓦官禪房三藏法師法意一其譯出自流沙一以西妙法蓮華經並有提婆達多品一而中夏所傳欠此一品一先師至高昌郡於彼獲本一仍寫還京師一今別爲一卷一

と、以上は提婆品に關する爭論の基ける所なるが、天台妙樂によりて與へられたる滿法師云々の説明と如何に結合して之を見るべきか、提婆品を一時妙本に欠きしは事實なり、于闐國が高昌郡かにて之を獲來りしも亦疑ふべからず、只之が什公所譯の提婆品(什公は欠けりとの議論は暫く別として)と如何の關係を有し、又今の提婆品一即ち滿法師の得たる提婆品は什公所譯か、將た法獻等の得來りし提婆品なるか、及び當時別行せられしものはその何れなるやは、未だ根據ある記録に基きて説明せられしを聞かず、余輩はこゝに一の疑問を有す矣

又頗多によりて魏武帝の時に初めて反譯せられし普門重誦の偈に就ても疑惑なきに非ず、或る者は此の如き信仰(彼は敢て俗信と云へり)は佛敎の尊妙を毀くる者なりとなし、又或る者は普門頌の如きは法華の大害にあらずやと憂へたり、兎も角もが長行を重頌せるに非ざるは之を疑ふべき充分の根據あり、唯に教義の上のみに非ずして、そが形体について

も直ちに長行と衝突せるを如何にせん、現行の普門品に曰

爾時無盡意菩薩以偈問曰

世尊妙相具 我今重問彼 佛子何因緣 名爲觀世音一具
足妙相尊 偈答無盡意……

と、具足妙相尊とは佛を指せりとの解釋なるを以て(觀音義疏記講錄に曰く、妙の一字は歎明なり、佛の具せる處の相は申三萬德二故に、妙の一字を附故に以て妙歎相)無盡意の乞によりて、佛に説き出されたる普門の長行と僅に矛盾を免れ得たりと雖も、若し夫れ麗藏添品を見る則んば、曰く

爾時莊嚴幢菩薩問無盡意菩薩言佛子以何因緣名觀世音一
無盡意菩薩即便遍觀觀世音菩薩過去願海一告莊嚴幢菩薩
言佛子諦聽觀世音菩薩所行之行爾時無盡意菩薩即說偈言
世尊妙相具 我今重問彼 佛子何因緣 名爲觀世音 具足
妙相尊 偈答無盡意……

と、爰に於てか偈の初二行を他意を以て解釋するか、長行末六十幾字を除去するに非ずんば、遂に之の矛盾を釋く能はず而も第二行を他の意に説明せんとせば、新に長行と衝突するを如何にせん、更に英譯を見るに、

その時に世尊次の偈を説き給ふ

(一)莊嚴幢(チトラドワフヂヤ)無盡意(アクシヤマテイ)に
次の問をなして曰く、何故に、時那の子よ、觀世音(アワ
ローキテーシヌワラ)はさ(觀世音)と呼ばは、や

日什上人置文諷誦章卷上

齡八十老比丘 阪本日桓 講述
増田聖道 速記

明六根互用之勝德、文此一句八字は法華經本門の法師功德品の大意を述べたる文で有ます。偕上の隨喜功德品の次に此品を説き給ふ來意は上の分別功德品にて説かれたる觀行五品の行人の因の功德と復た次ぎ上の隨喜功德品にて説きたる五品の中の初隨喜の行人の因の功德は未だ果報を得ざる事なれば其功德が幽冥の内に在て明かに分ならず微密にして人目に立ちませんから設令佛が巧妙に説き給ひて教るとも所化の人々が信を取りませんから其所て佛の思召給ふには寧ろ相似六根清淨の位に昇り果報を得たる行人の彰灼なる功德を説て初心の行者をして信仰を取らしむるにはしくは有るまいと思召して分別功德隨喜功德の二品の次に此の法師功德品を説せ給ひたるので有ます。扱て今の諷誦章の一句八字の文の意を辯じますれば此の品には人間界の人々の赤白の二滯和合して五身(の身分)となりたる父母所生の我等が汚穢不淨の肉眼耳鼻肉鼻肉舌肉身肉意の凡夫の六根に於て法華經本門壽量の事の一念三千三大秘法を受持し讀誦し解説し書寫して此五種の修行を成じたる信者行者は現在世に於て相似六根清淨の内凡の位に昇り眼に耳の功德鼻の功德舌の功德身の功德意の功德を具

(二)是に於て、大悟自證の海なる無盡意は、其の事の状態を考へて、莊嚴幢に答へぬ、觀世音所行之行を聴け云々

とありて、具足妙相尊云々の語は遂に之を見出す能はず、此の如くにして以上三個の相異なる普門の偈中、別行の際に混入の疑ある偈答無盡意の數句は、數千里を距て、全く交通を絶らし二地方より發見せられし、二個の異なる材料に一致せる莊嚴幢と無盡意との問答に關する記述を除き去るよりも、寧ろ之の數句を除かざるべからず、もし二者を共存して會通を加へられれば可なれども、然らざる限りは梵本と麗本(偈の初二行は、他の諸本の影響に非るなきか)とを取りて、他を捨つるは蓋し至當の事ならんか、此に於てか更に余輩は梵文法華經を英譯せしケールン博士によりて既に注意せられしが如く、普門の偈はその長行と具體的の矛盾を來せりと推斷せざるを得ず(ケールンは莊嚴幢なる名は他に發見する能はずと云へり)かくの如き怪しき(余は敢てかく云ふ)普門の偈は何故に法華の内に混入し來りて、羅什を去る百五十年の後に編多によりて反譯せられ、更にその卑近なる俗信は湯々として人心を收攬し遂に妙本中へも混入して、かくて法華の心を殺すが如き信仰をすら數吹するに至りしが、ろの混入は何時頃にして、如何にして行はれしか、これ等の消息を知るは蓋し普門品を讀むに新しき指針を與ふるものと云ふべく、之れ余輩の疑問の一なり矣

足し眼の一根に於ても六根の作用をなし耳にも鼻にも舌にも身にも意にも一根毎に各々六根の作用を成して身の清淨なる事淨き琉璃珠の如く六根互用の勝徳の果報を得たる行人の功德を説き明したるが今の法師功德品の説相て有ると御書になつた御文章で有ます。設令他宗所依の教經を用て受持し讀誦し解説し書寫して五種の修行をなすとも此の眞實の六根互用の勝徳を得ることは石中の油水中の火にして取り得る事は出来ません。是れはこれ獨り法華經本門壽量三大秘法の妙法の功力による者で有ます。此の六根互用の勝徳の法門は本宗所依の法華經に二十重の大事の法門が有ます。其中の隨一の法門で有ます。此の二十重の大事の法門の事は我が宗祖大聖人録外の御書十七の卷におかきになつて有ます。から篇志の學生達は彼の書を披て御覽なされよ。其處で此の内凡の六根清淨の位に進み昇る行人には上中下の三根の人が有つて昇り方に不同が有ます。一には最上利根の行人は第一の初隨喜品の位より中間の四品を越超して直ちに六根清淨の位に進み昇ります。二には中根の行人は昇り方に不同が有ます。或は初隨喜品と讀誦經典の二品を修行し第三第四第五の三品を越超し六根清淨の位に昇り或は第一第二第三の三品を修行して第四の正行六度の一品を越超して六根清淨の位に昇る行人も有ます。三には最極鈍根の行人は五品を悉皆修行して六根清淨の位に昇ります。又此法師功德品の五種の法師と上の分別功德品の觀行五品の行人とに

就ては三の不同が有ます一には開合の不同二には因果の不同三には師弟の不同で有ます初の開合の不同と申すは法師功德品の五種の法師の中の受持の法師は分別功德品の觀行五品の中の十信具足初隨喜品の行人の位に當りますまた五種の法師の中の讀の法師と誦の法師と此の二人の法師は觀行五品の中の第二品の讀誦經典の行人の位に當りますまた四種の法師の中の解説の法師は觀行五品の中の第三の更加説法の行人の位と第四の兼行六度の行人と第五の正行六度の行人と此の三の行人の位に當ります亦た五種の法師の中の書寫の法師は總じて觀行五品の行人の位に當ります是れが開合の不同と申すので有ます次に因果の不同と申すは分別功德品の觀行五品の行人は因の位に在る人て有ます法師功德品の五種の法師の行人は果の位に在る人て有ます是れが因果の不同と申すので有ます又次に師弟の不同と申すは法師功德品の五種の法師の行人は師匠の位に在る人て有ます觀行五品の行人は弟子の位に在る人て有ます此の通り三の不同が有ます其開合の不同因果の不同師弟の不同なる委細の所以を辨じて聽せたまひて有ますが講談の時間に限りが有り且つまた外に辨せねばならぬ事がありますから他日に譲りて畧します借て學生達よ本地久成の本佛大恩教主の釋尊の佛知見を以て視るなほし給ひなば我等が如きの一惑未斷の荒凡夫なる父母所生のこの不淨の六根の各々差別して不自在なる身體に於て互具互融して不思議自在の

勝妙なる徳用を具足したる衆生なりと徹見し給ふといへども悲哉我等は三惑の迷雲に互具互融の不思議自在の六根の勝用を覆ひ隠されて汚穢不自在の六根の身體を見るのみで有ます又た立ち還て本佛の金言宗祖の妙判に隨て深く考へますれば亦復此の上もなき悦ばしき事には此の老比丘を始め講下に列りたる學生達は俱に宿福の甚幸有りて法花經本門壽量品の三大秘法の妙法を信念し口唱する功徳に酬へて今生の汚穢の肉眼肉意の凡夫の眼凡夫の智慧にては明了に徹見する事能はずといへども本佛本懷の三秘の妙法を信唱する大功徳力に催されて無始本具の互具互融の清淨無垢なる六根互用自在の勝徳が少し膨れ揚り顯われんとする身の上で有ます其所以我等が臨終の夕には直ちに内凡相似六根清淨の位に入り自在に六根互用の外用をなして速に本佛鉢内の初住眞因の大菩薩の位に登り信智一鉢が家の觀智を以て事の一念三千の觀心を凝し其觀力によつて四十二品の無明の煩惱の中の一品の無明を斷じ一分の無始事常任無作三身の佛鉢を顯してよりは餘の四十一品の殘斷の無明を切斷する事は容易事て有ます譬一本の竹に四十二の節の有るを初めの一節を破れば餘の四十一の節はばらばらと容易破ると同じ事て最初の一品の無明の煩惱を斷すれば餘の斷じ殘せし煩惱を斷する事は極めて易き事て有ます初心後心俱に難しといえども中に於て初心尤も難しと釋して初心の時の煩惱を斷するは難き中の難き者て有ます借

學生達に一すお咄しておきたき事が有ます或人の申すには本宗の信者は信念成佛と申して始め凡夫より終り妙覺の佛となるまで智を用ひずして信念の一方にて成佛する者であると教えたる教師があつたと申して老比丘に告た者が有りました此の教師さんは下種の時と熱益の時と脱益の時の行者の身トを知らぬ偏屈の謬見なる教方て有ます下種のときは理即に秀たる名字聞教の幻稚の凡夫の身分なれば智を用るに縁なくよつて信智一鉢が家の信を以て恵に代へたる以信代恵の行人なれば信念口唱して下種して智解を用て事の觀心の修行を致しません其所て熱益のときは外凡内凡の觀行相似の位より初住已上の成長の學解發達の身分なれば信智一鉢が家の恵を以て信に代へて學解發達の智慧を以て眞の事の一念三千の九界も無始の佛界を具し佛界も無始の九界に備はる十界互具百界千如一念に三千を具したる事の觀心を修行して終に妙覺果滿の脱益を得る者て有ます老比丘は未だ聞きません名字聞教の幼稚の凡夫が佛になるまで無智にして成長せざる事をまた内外凡の位に在る南嶽天台等が不學不文字の愚鈍の人にして理の一念三千の觀心を修行せずして入寂したる事を聞きません況や初住已上の大菩薩が末代の我等が如きものと同等なる關鈍の大菩薩が有し事をいまだ聞およびません是れはこれはお咄が頼だ横道へ這入りました此の事を論ずるには尤も長き時間を消しますし且當文の所用て有ませんから他日に譲りて辨じま

せん其所て學生達よ日月は常に天にかゝり其れを見ざるは盲人の過にて六根互用の勝徳を見ざるは我等迷者の過にて無始己來六根互用の勝徳は我等に具して有ることなれば迷の闇が晴れますれば六根が互具互融して其作用を明かに徹見する事が出来ません例せば百年の闇室に一夕燈火を用れば室内の一切の物品を明に見らるゝが如く我等學生達と共に名字聞教の迷の闇の身も體て内凡相似六根清淨の位に昇り相似十信の智解の燈火を用ひなば日頃疑惑を懷きたる我身の六根互用の作用を見て何る程なる程斯じやとと昔し見ざるは我等迷者の過であるといふ後悔する時を御覽なされよ其時ころ老比丘が申しました語を首肯するて有りませう

不受不施史料 (八)

梶木日種

六、不受不施二派の現状

前節に述べたる如く天保法難に由りて不受不施の法燈は斷絶したが、その際二三の清法のもの辛うじて残つたので、それ等のものが僧侶なして壁に曼陀羅といふ變體な流義を立て、内信者に頼つて傳へ來つたものが今日の二派なのである、今不受不施派の釋日正は天保法難の折には僅かに九歳位の兒童で、備前の新保村の尾崎といふ家に居つたが、手習子であるといふて漸くにして縛を免がれた、この時分彼は講師派

の小僧であつたが、その後彼れの俗縁の導師派日指方の信者に引取られた結果、遂に堯門流の僧となつたといふ、彼は明治八年に至りて不受不施派の再興を企てたのである、尤も該派の師資相承といふものを檢べると、宗祖より日奥まで二十一世とし、京都妙覺寺の歴代を採用し、日奥、日樹、日蓮、日述、日起、日清、日要、日徳、日助、日信、日然、日縁、日珠、日惠、日正に至るまで三十五世嫡々相承し來れりとして居る併しながら日奥の次の日樹は池上の日樹で、日蓮は小湊、日述は平賀であるから、この間に何等の脈絡なく毫も師資相承が成立たないのである、又講門派の方は如何であるかといふに、妙覺寺日奥の次が日智日講と傳へ日珠よりは大阪東高津の秀妙庵の傳燈が日寛まで歴然として相續してあるが日寛の後、日照、日東、日正、日心、日允(これは後)及び現代の日心となつて居るのである、この日照といふは作州妙泉庵の僧で、日東は字を智元といふて、共に天保法難に召捕られたもので、又日正といふは日寛と師弟の契約をしたといふが、日心との間には師資の干係がない、即ち日心は元單稱日蓮宗の僧で不受へ歸入してから自受誓戒をしたのであるこの相承の事に就ては兩派の間互に争があるが、要するに清派の傳燈は天保法難を以て斷絶したと云ふのが正當であると思はれる、殊に二派の再興の始末に就て論ずれば、孰れも不受の精神を滅ぼして居る嫌があるから、これよりその顛

末を述べやう、
備前國御津郡金川村大字金川に在る、不受不施派の本山臥龍山妙覺寺の大法主釋日正が、去る明治八年六月二十二日初めて時の教部大輔に不受不施派再興の儀を出願した、處が翌七月二十八日付を以て「管長上申の旨あるに依り、願の趣開届け難き」旨指令を受け、同年九月九日再願書を出し、同十一月七日三度懇願した結果、遂に翌明治九年四月十日に教部省より布達第三號を以て「日蓮宗中不受不施派の義自今派名再興布教差許す」旨を令達せらるゝとなつた、その始末は同派が明治九年十一月より刊行した龍華新報に連載してある、又大内青巒居士がこの事件に就て不受派の爲めに盡力したとも已に世人の知る所である、又その際日蓮宗一致派管長新居日盛が明治八年九月二十三日及び十二月二日付を以て「不受不施は非宗義で行政上妨害不尠若しこれを許可せば皇國幾許の恥を海外に傳ふと」上申したとは、已に明治八年上申書と題して公刊されてあるから、彼此對照すれば當時の狀況は判明する、さてこの日正の第一の願書は不受兩派の分立等を述べて許可を請ふて居るが、再度の分には「聊か慚悔の情實も有之」といふて、その別紙に
先言の失當たるを覺悟し……
野濤先に出願せし文面を顧視れば、野濤も亦た彼の奉ずる所を排撃する者多し、此れ彼の管長を咎めんよりは、

宜しく先づ自から罪すべき者にして、御省の允可を得ざるは理の當然たりとす
假令不受派を異にするも、皆宗祖の末裔に列し共に友愛する兄弟なり、兄弟故なきは天下の樂しみと聞けり、今彼の管長なる者野濤等を見て故なしとする歎、故ありとする歎必ずその焚溺を水火の中に救ひ、始めて天下の至樂を受くべし
是非を論ずるは即ち先書の失當にして豈之を再たびす可けんや
抑々争論の原由一端に非ずと雖も、政府の東縛に苦しみ反動するもの多きに居れり、野濤既に自から既往に懲芥し將來を省察す、又その懲芥し省察する所を擧て、之を信徒に勸誘せんと欲す、彼の管長も亦た此の如くたるを聞かば、定んで鶴原の情ある可し、若し尙は異言あらば宗祖在天の血涙を如何せん

れに對して寛文の流僧中六人を選んで後六聖人と稱へて居る即ち日述、日澆、日講と日堯、日了及び青山の日庭を後六聖人と云ふて居る、併しこの六人の内述、澆、講の三人と他の三人とはその主義を異にして居つたとは前に詳述した通であるから即ち清濁の兩派を混淆して居るのである
かく不受派が軟化して雜亂になつたから、これを非難して、その門中より別派したものがある、それは淺沼日歸といふて今は備前國上道郡平井村に居るといふ、現に少數の信徒が日歸に隨從して居るのである
次に備前國御津郡金川村大字鹿瀬に久遠山本覺寺といふ本山がある不受不施講門派の開派に就ては、今の管長、釋日心が去る明治十三年四月十七日初めて時の岡山縣令に別派獨立を請願したので、同年十一月再願書を提出し、同十五年三月十日内務省乙第十六號を以て「派名公稱布教差許す」旨を達せられたのである、處がこの請願に就て一の或説がある、それは日心等が請願事件で上京中、即ち明治十五年一月十一日付で不受派の管長、釋日正へ宛てた日心と國本徳一郎といふものとが連署した依頼書があるといふ、その文を見ると

杯とある、これに就て龍華新報の編者は、今の大法主が深く時と機とを鑒がみ、請願の結果再興の嘉運を開いたのは、偏に皇恩と大法主の深厚なる法恩とに依ると、稱賛して居るけれども、悲哉不受の精神はこの時已に業に消失せたと謂はねばならぬ、その故は前述べ來つた古人の苦節と對照して見たならば、思半に過ぎるであらう、
又該派では寛永法難に追放された六人を前六聖人と稱へ、こ

(前略)日心會て聞く兄弟牆に聞げども、外其侮を禦ぐと世俗親戚の情猶ほ然り、況や和合を以て主義となす僧侶社會に於てをや、其祖宗を一にし、其派源を同ふするに於てをや、日心不肖と雖も會て講門の法流を繼ぎ、閣下と同

く奥祖の遺旨を奉じ、信徒と共に講師の垂示に服す、實に是れ閣下と兄弟の誼あり、閣下豈また鶴鶴の情なからんや蓋し往事は説くべからず、取て之を説かんと擬すれば、唯啼涙の衣襟を沾すあるのみ(中略)官府成規あり、凡そ不受不施を以て派稱となす者は、必ず先づ已に其派稱を公有する者に就て承認證印を求むべしと、成規已に然り、而して日心の閣下に於る固より兄弟の誼あり、事に臨て其兄の承認を求む誠に弟たるの分なり、乃ち其書を捧げて閣下の證印を請ふ、伏て望むらくは閣下慈悲速に之を印可して、日心が宿志を達せしめ玉へ、抑も日心が退て貴派に服従すると能はず、進て特許を請願する所以の者、蓋し異圖あるに非ず、萬々止むを得ざる事情あるを以てなり、故に一旦特許を得るの後は、務て信徒を勸誘し、必ず貴派と合從して同胞一味の源泉に溯り共に大孝を祖先に盡し、初て本派再興の素懐を完了せんと欲するの外他事なし、豈長く貴派と角立して鶴鶴の情に背くべけんや、是れ日心が豫め心に誓ひ、夙に閣下に望む所なり、閣下其れ諒察を垂れたまへ、臨書氷淵心事を盡さず、云々

その際日心等は内務卿へ更に願書を差出し、これに不受派管長が奥書したといふ、その文は

前書釋、日心請願の趣、事實相違無之、且つ當派に於て支吾之筋無之のみならず、至急御許可を蒙り、日心並に信徒

出した、その儘該件に對して政府の方より何等の沙汰がないしかし不受派では矢張事實あつたものと云ふて居る、この事が一の動機となつて、講門派中少數の信徒と二三の僧侶は別派して、現に岡山市上西川町に河内F允等が一派を立て、居る、即ちこの日允といふは前に除歴したと書いて置いたもので、一旦日心の次に法燈職に就き開派請願の前に日心に讓位したが、開派後管長職の事に就いて彼此紛紜を來たし、遂に奥書進達事件を中心として分裂するに至つたものである、前年予が講門派に在つた折、この西川派と法義を論じ掛けたとがあつたが、談判開始の手續上に彼我異議を生じた爲めに果たさなかつた、予は今の時心竊かに奥書進達事件に就て公平なる意見を持して居つたから、若しも彼れと對談したならば結局今日の講門派といふ宗團の解散を主唱したかも知れぬ、それは何故かと云へば假令講門派の當局者が不受派に對して實際依頼書を發しなかつたとしても、政府に於ては成規上不受派の奥書を要したと認めらるゝから、奥書そのものが宗義上瑕瑾であるとすれば、どうしても宗團を解散せねばならぬと考へたからである

かくの如く現在の二派はその派名の公稱を得ると同時に退嬰主義に化したのみならず、何れも小分裂を來たしたとは頗る惜むべきとである、或る史家は二派が將來勃興したならば受不施派との間に必らず衝突を來すであらうといふて居るが、

明治の徳澤に浴し、積年の鬱屈を伸候様、深く希望仕候云々

とある、これを奥書進達事件といふのである、そこで講門派がいよいよ許可になつた時、不受派はかく奥書進達をして遣つたから、許されたのであるといひ出したが、講門派はそんな覺はないと争ふた、その結果明治十五年六月二日金川妙覺寺へ日心徳一郎等出向して、日正等に面談し立會の上で該依頼書を檢閲して、該書は毫も日心等に於て覺えがない全く何者か偽造したものだと論定したさうである、尤もこの依頼書は郵便を以て日正の許に届いたといふのであるが、本來云へばかゝる重要な事柄は日正自からが、その當時日心等と面談した上で奥書すべき筈であるのに、それ等の手順を欲いて居る所は日正派の手落といはねばならぬ、處が同年七月五日付を以て岡山縣令より、右公許相成候儀は本縣を經由差出願書之外單稱不受不施派管長より願書面へ奥書進達之分も有之旁、公許相成候筋に有之旨、其筋より通達有之候條、信徒等に於て心得違無之様説示可致」旨を講門派の方へ通達して來た、依て講門派よりは同年八月十八日付を以て「去る七月五日付を以て御通達に相成候得共、素より弊派は獨立の宗義なる故、本縣へ差出候願書之外、釋日正の奥書進達有之分違差出候儀決して覺無之に付、甚了解難、致候條、何卒其筋へ御照會被下度として、該通達書を添付して縣廳へ伺書を差

若し今の二派に中古の如き氣概が存して居りさへすればさうなるべき筈であるけれど、今日の狀態より察すれば只消極的に不受主義を墨守するに過ぎぬであらう

上來數節に分ちて不受不施の來歴を紹介した、仍ち擲筆に臨み聊か二派の氣節ある眞俗に勸告する、諸子にして苟も先師先哲の遺風を憶はく、須らく内信時代の陋習を抛ち偏僻煩瑣の形式に泥まず分立割據の頑夢を破つて、速に來りて吾人と共に宗教統一の聖業に従事するが宜しい、然らずんば何の面目あつて古人に面ゆるとが出来やうぞ、諸子夫れ九思三省せよ

(付言)この史料は特に史家の需もあるから他日増訂して別刊する積である

『子の法華經觀』出版に就て

先更會幹事

渺たる一小冊子、事々しく之が出版の事由を語るの必要を認めないが、然し又創業の時期より發展の舞臺に移るべく、本會が前途のしるしとして之を世に公にするとの上より考ふれば、或は多少の語るべきを有たないでもない、が、それは先更會の新しい計畫に屬するものが大部分を占めて居るので直接この出版に關する事柄ではなからう、而して本會の計畫

に就ては事實を以て之を世に發表する考である、出来もせぬ内から聲計りを高くする口の輩たるは吾人の欲しない所である、で、今こゝに報告するを欲しないが、但、抽象的に吾々の覺悟と方針吾人が妙法宣布の重任を果たすが爲には、吾人は如何の力を有し、又如何の方法を取るべきやの、吾々の覺悟と方針とを語るのには、殊に雄飛すべき必要の多い戦勝國の新年には決して徒勞でなく、又諸君の参考に資しうべきものあるを信ずるのである

他國の浸逼を防ぐには兵が唯一の勢力であるが如く、乳を得んと欲する小供は啼泣以てその希望を達し、又自分の我儘を貫かうと思ふ婦女は憤懣を以て之を成し遂ぐるの、彼等にとつては啼泣や憤懣が無限の力であらう、然らば一世を救ひ苦海に沈淪せる迷衆に安堵を與へんと思ふ吾々は、果して何によりてこの希望を達し得べきか、啼泣は小供には無限の勢力であるが、大人には更に何等重要な條件でなく、金は能く衣食住を與ふる力をもつて居るが、然し時に革囊を枕に餓死したためしもある、甲の力は乙の事業に對しても、亦乙の人に取られても甲の働をなし得ない事は、何人と雖も之を拒まないであらうが、末世弘通の爲に吾人甲斐なき者共の能く運轉し得る力とは果して何であらうか、範圍、即ち吾人の用ふべき力は果して何であらうか。

佛恩報謝の爲に僧俗共に法華の宣傳に努力すべきは言を俟

女に郵券を送ると共に、之と同じ手紙を更に三人の友人に發送すべしとの事、かくて第五十番に至つて止むのであつた、此の如くにして手紙が友人から友人へ鼠算用で廣まつて行つた折には、その勢力は如何に大であるかは想像するに余りあらうが、かくてかの小女は三錢の郵券を集めて遂に數萬金を得たのであつた、この一小話は何等の教訓を與へるであらうか。

余輩はこの一小女よりはより大なる力を有せる筈である、その志望よりもより清き目的に働けるのである、困難なる事業ではあらうが、何ぞ失望するに足らんやだ、余はかの小女の成功した所以を考へて見た、彼は多くの人の力を利用したのでなからうか、孤兒院を助けると云ふ清い目的に幾百萬の人を一致して向はしむるべく、その動機を作つたものであらう、甲に向つて走れる物体を推して一寸右へ向はしむれば、之を遠く走らしめた際にはその最初の目的地を去る事能く幾百里なるの知らないのであるが、然し一寸推す力は極めて小なのである、小女は實に此の如き力を與へたものであらう、かく考ふれば余輩は頗る心強い所がある、筆と口とはよく思想の潮流を作るものであつて、その志望が清く崇かつたならば既にそこに無限の力があらう（よしこの力は直ちに事業をなすに用い難しとすとも）、之によつて人の情思を動かすのは、吾人にもなし得らるゝ所でなからうか、かくて余輩は

たないが、その事の至難なるは又頗る吾人を失望せしむるのである、之に要する準備——即ち吾人が布教すべく要する力は殆んどあらゆる方面に亘つて居るので、學問も要り、財力も要し、辨才も、文筆も、又努力、忍耐、智略等幾多の力を完備する事を要するが、齟つて吾人の有せる力は果して何であらうか。積極的に有せるは、不完全ながらも筆と口との二力のみである、が、その要素たるべき學識智略に於ては頗る足りない、殊に金の一事については全く皆無なのであり、活動の源泉及び燃料たる資財に就て絶望するの止を得ないのである、かくの如くにして何をなしうべきか、消極的には熱誠と忍耐とは兎に角に之を有せりと思ふ、が、欠けたるはとて數へ切れない、之の方面にも頗る心細いのである、とは難も坐して止むべきでない、石に矢の立つと云ふ譬もある、一小石片が大巨人を倒したのである、不足なる口と筆との二力、些少なる熱誠と忍耐との二つは、之に與ふるに充分の速力を以てして、吾人はこの一小彈丸に等しき微力に、敵を倒す丈の一大威力を與へたいと思ふのである、吾人は果して如何なる手段によるべきであらうか。

昨年の萬朝報を讀みし人は、いかにして一小女が數萬の金を集め得たかを見たであらう、一片の手紙、それは某孤兒院に寄附すべく、郵券一枚の贈與を乞ふた手紙三通は、熱誠を以て親友の三人に送られたのである、之をうけた人は彼の小

法華宣傳の爲に筆を取る事を徒勞でないと思ふ、と同時に異体同心を口にせる吾々同じ教團に属せるもの共が一の目的に合つて動いたならば、いかにその勢力が大きからうかと思ふのである、孤兒院を助ける爲に幾百萬の人が動いたとすれば佛恩を報謝する爲に吾々同じ教團の人々が何ぞ一致し得られない事があらうか、然り吾人は確に一致せる者である、布教の爲に心を等しくせるものである、が、然し又その活動たるや局部に限られ地方に局まつて居なからうか、抽象的には共同せりと云ひ得とも、具体的に某の目的に一致して吾人等全体が動いたと云ふ事は頗る稀なのである、時代は常に推移して、世は刻々に形勢を異にしつゝ、あるのに豈此の如くにして宗門を憂へざるを得ないやを、吾人は少しく人々の醒覺を希ふと共に、自らも大になすあらんと思ふのである。

が、吾人の有する力は前にも云ふ如く筆あるのみ、口あるのみ、熱誠あるのみ、正實あるのみであるから、吾人は寧ろ諸君を動かすべく、その動機たらんと決心したのである、啼泣に等しき筆と口との力を有するのみなる吾人はそれ相應の志望に甘せんと思ふので、吾々の叫びによりて諸君を動かさしうればそれで充分であらう、この度の出版は實に此の如き趣意より諸君をして法華の尊妙を深く印象せしめんと企てたもので、その内に如何計り高遠なる教訓が含まれて居るかは諸君が味ふのに任せるとして、唯吾人はこゝにためしの一の矢

を放つて、暫くその矢筈を待ち更に引き續いて教團全体を
或る目的に働かしむべく、あらゆる絶叫を上げんと思ふので
ある、唯願くは施本用として力を致した吾人の徹衷の貫徹せ
ん事を希望するのである。

(この稿は極めて匆卒の際のものしたるなれば、定めし滅
裂的のものであると共に、印刷の誤謬も亦多からん事を余
は豫め諸兄に謝する者である)

宗門の教育に就きて

聖峰生

小序

大聖世尊かくれましまして既に三千年、大法東に流れて日
出國に入り、鬱乎として繁り蒼乎として榮むしかども、世下
り人劣く、今や漸やく瀾亂して復た救ふに由なからんとす。
抑も宗教の感化は教祖の人格に對する遺弟の信仰より生ずる
ものにして、人格の特殊性は其宗教の特殊性となり、信仰の
強弱は其宗教の振不振を決す、基督教の比較的熱烈活動に
富める、佛教の比較的寂靜圓融なる、何れが教祖の餘音を傳
へざるものぞ。教祖の人格は、各萬世不易の大法の源泉をな
せるもの、今日強いて是が變易をなさんと欲せば牽強附會の
捏造説を立つるか、然らずんば始皇の故例に倣いて、焚經の
暴を敢てせずんばある可からず。然も到底人心の根底に播か

れし種子は是を刈除する能はず。
何をか人心の根底に於ける種子と云ふ。吾人の意味する所
のものは、即ち各人の心的傾向、趣味の如何、四境の狀態、教
育の異同等によりて、形成せられたるものにして、換言すれ
ば各人の性格を指して云ふなり。玲瓏玉の如き性格のもの、
剛嚴不撓の性格のもの、因循爲すなきもの、講詐奸佞を愛す
るもの、霸期古今を睥睨するもの、曰く何、曰く何、數へ來
らば日も亦足らざらんとす。等しく是れ横目縦鼻、然も差別
相よりすれば、各人悉く其性格を異にすと云ふを得べし。
されば人各其好む所に從て、各其欲する所に趣むくは、亦自
然の數なり。若し夫れ洋々たる大海を家となし、游々として
激浪怒濤の中を趨遙するものをして、幽咽たる泉流に住まし
め雲を搖つて碧天に縱横するものをして、踟躕たる囹圄の中
に起伏せしめんとせば、管に其性能を毀損するのみならず、
其弊や延いて以て世を毒せずんば止まざらんとす。
然れども亦彼の欲する所を行はしめんか、自我の欲求に從て
之に趣く事、疾風雷電の如く、同調の情緒あるや、是と握手
し、提携して以て自我の満足と、安慰とを得、亦以て世を救
ひ、世を度せんとなす、宗教に於ける信仰と稱するもの、一言
にして云は、實に此人格の合同親和なりと云ふべし。或者は
基督に行き、或は佛陀に趣く、其是に趣くは、實に信者の内
心に於ける要求が、佛陀或は基督に於て、戀人を得たるが如

く、無限の安慰と、平和とを得ればなり。

吾人は先に究竟すれば、各人の性格は皆異なるべきを説け
り。然れども亦一方よりすれば、各人の間には融通一味なる
相會點あり。一宗教の信者が同一教祖を以て信仰の中心とな
すは即ち是が爲めなり。是に於てか一宗教の盛大を來さんに
は、勤めて各人に教祖との融通點を發揮せしめ、以て彼が信
仰心を奮起せしむべし。是れ佛弟子、否一切の宗教信者の當
に爲すべき義務なり。余輩不肖淺學短才、敢て其任に非ずと
雖も、以下少しく其感ずる所を記し、併せて宗門教育に就き
て論ずる所あらんとす。文を售り、辨を好むは欲せざる所、
而も今數言を費やさんとするもの、誠に衷心抑へ難きもの存
りて存すればなり。

本論

宗教家は「生るべきもの」にして、作るべきものに非ず。吠
陀、優波尼沙土、數論等、幾多の幽玄高妙なる哲學的宗教的
の諸學派が、蘭菊の美を競ひて、五天竺に其勢を振ひたり
しと雖も、其今日に及ぼせる影響に至りては、一沙門ゴータ
マの唱へたる教に比すべくもあらず、佛陀の哲學は其高妙な
る點に於て、其幽玄なる趣に於て、敢て他の諸派に超えたり
と云ふにもあらず。而して其結果に於ては、一にかくの如
し、是れ抑も何によりて然るか。誠に彼が宗教的天才の偉大

にして、よく其弟子を感化し、後世をして其徳を欣慕せしむ
るが爲めならずんばあらず。其他キリストに於て、マホメツ
トに於て、皆是れ生れながらにして、宗教家たるべき素質を
有せしものと謂ふべし。果して然らば、宗教の擴張宣布は、
是等絶大なる天才を待ちて、而して後に非ずんば企及し得ざ
るが如き觀あれども、必ずしも然らざるなり是れ即ち宗門教
育の興りて力ある所以なり。
茲に於てか、吾人は宗教家に二種あるを思ふ。一は則ち生
れながらの宗教家にして、他は則ち作られたる宗教家なり。
元より此區別たるや、漫然たるものにして、決して嚴密の意
義に於けるものにあらず、前者は所謂一宗の開祖とも稱する
を得べき宗教的天才を指し、後者は其宗の信仰を繼承し、
且つ他に對つて布教傳導するものを云ふ。前者は則ち千、百
年に一人を得べく、後者は普通に所謂宗教家なり。
人心の異なるは、尙其面の如し。其主義主張を同じうする
ものと雖も、尙些少の點に於て異なり。全く同一なるは是を
求むる事得べからず。蓋し、各人の性格各別なればなり。さ
れば同一教祖を頂き、同一經典を奉ずる者と雖も、多少其色
彩を異にす。例へば同じく淨土教に屬すと雖も、善導のそれ
と、道綽のそれと、將た法然親鸞のそれとは、大に其面目を
異にするが如く、台家の法華經の解釋と、日蓮のそれと、起
を異にするが如し。佛教が或は汎神教の如く、無神教の如く

或は一元論なるが如く、多元論なるが如く、或は一神教なるが如く、多神教なるが如く、元より釋尊以前の哲學的思想混入の結果なりとは雖も、後世之を奉ずるものが、各自己の性格を通じて、觀察し研究し、信仰したるに職由せずんばならず。

佛敎と云はず、基敎と云はず、異宗分派を生ずる所以は、概ね上述の結果なりと云はざるべからず。

二、

以上の所論により、同一敎祖、同一儀式、同一形式を有する一宗敎の信者も、其信仰を具さに檢する時は、殆んど各人各別なる事は明なり。羅馬敎會が信仰箇條を制定して、之を信徒に示し、一定の形式によらしめしは、實に生靈ある人心の如何なるものなるやを知らざりしものと云ふべく、遂にルーテルに至りて大反抗を來したる、誠に當然の事なりと謂ふべし、然れども一個確定せる所謂成立宗敎にありては、其信仰を各自の自由に放任するは、遂に分派異同を來す基にして、誠に悲しむべきものなりと雖も、亦人心の歸向する所、如何ともすべからず。羅馬敎に比して、新敎の小分派が驚くべく多數なるは、蓋し人心の自由を尊びし結果ならずんばあるべからず。

茲に於てか、一宗門が其敎の枝を起し、以て有爲の傳導者弘法家を作らんとする上に於て、困難なる根本問題の存する

あるを見る。何をか困難なる問題となす。曰く、敎祖の敎義を研究するに當りて、各人の自由に任ずべきか。將た一定の註解を作りて、必ず是によらしむべきか、是れなり。

如上の問題たる實に宗門敎育に於て最先に決せらるべき重大なる問題なり。余輩遽かに其何れかに配を采らんとするの大膽を避けて、暫時其根本に入りて論ずる所あらんとするは誠に是を思へばなり。

今便宜上所論の明晰を得んが爲めに、此二つの問題を別ちて、其各につきて論せん、元より此外に尙種々の實際問題あるべしと雖も、今は又稿を改めて論ずべし。

一、敎祖の敎義を研究するに當りて、各人の自由に任ずべきか。換言すれば批評的研究を許すの可否。是れなり。

此問題は、研究者の程度によりて、又自ら二種類となる。(一)智識の未だ幼稚なる者に之を許す事の如何と、(二)一定の智識以上に達したる者にのみ限りて是を許す事の如何と、是なり。(一)は何人と雖も是を許す事の危險にして、寧ろ許すべからざる性質のものたる事は明なり。されば問題となるべきは(二)にあり。

一定の智識に就きて、尙一言すべきものあり。抑も楚人の情は之を知る楚人にあり。中國の情を以てして遂かに之を嘲り笑ふは吾人の取らざる所、今某の科學に於て名一世に高しと雖も、其科學に用ふる標準を以て、某宗敎に對して斷案を下

るを用ゐん。心平なる能はず、政權に従ふ事が中心に疾しく常に薄氷を蹈むが如き威を惹起するに於て、始めて宗敎の批評的研究起る。

人各其面貌思想を異にすと雖も、それは極めて微細なる點に於て云のみ。されば東西の賢哲、大思想家の思想は、期せずして同一なるあり。釋迦の慈悲を説き、孔子の仁を述べ、基督の愛を云へるは云ふ迄もなく、近世英獨の倫理界に於て専ら唱導せらるる自我實現説を、夙く既に我大學一卷の中に散見するに非ずや。彼等の間には、何等思想の傳承なし、然も其相似たる何ぞそれ斯くの如きや。然らば一旦同一敎義に従ひ、同一宗敎を奉じたるものが、如何に批評的態度に出づると雖も、若し其思想にして破壊的ならざる限りは、豈に其間宵壤の差を生ずる餘地あらんや。是れ人心本來の要求に應じたる研究に出づればなり。而して、人心は同一認識と同一經驗を有するものなり。(是れに就ては今尙哲學界に於て研究されつゝあるものなれども、措らく吾人の常識に従てかく斷言するのみ) 某々宗派が戦々慄々として、派内の僧侶信徒が、時に大膽なる改革的態度に出づるを見て、破門や、停堂を以て、防遏せんとする、誠に笑ふべき事と謂ふべきなり

知らずや、ルーターの改革は、人心自然の要求が、遇々彼れに於て爆發したるものなるを。

すは、實に早計と云はざるべからず。況んや宗敎は學問にあらず、實際の經驗を経ずして、妄りに之を批評し、論せんとするは、暴も甚しと云はざるべからず。是に於てか、其批評たる内容的批評たらざるべからざるは明なり。然るに我國所謂學者間に於て、數年前頻に宗敎に對して辯難攻撃の聲喧しきものありしと雖も、今にして思へば、そは誠に學者の空論に過ぎざりしなり。彼等のあるものは、哲學に於ける實在を以て、歸命の体となさんとし、あるものは心理的見地に立ちて漠然之を批評し去らんとす。未だ宗敎が有史以來、如何に人類に欠くべからざるものなりしかを知らざるもの、如し吾人は繰り返して曰ふ。宗敎は人心の根本に横はれる自我の慾求、自覺の響、慾求の満足なるを。何處に行き、誰に歸すべきを知らず、夢の如く明し、夢の如く暮せしものが、一度我の問題に逢着して、そが解決に苦しみ、惱める果てに、一道の光を認め、希望を生じ、安慰を得たる所、即ち宗敎なり。未だ、切實に人生問題に思ひ到らずして、宗敎を談ずるは、尙案上 職を論じ、疊の上の水練を説が如きのみ。

茲に於てか、讀者は既に余輩が先に掲げし問題に對する大膽の考を豫想せられしを思ふ。即ち吾人の考ふる所は、宗敎本來の性質に一任すべきてふ事是れなり。彼れが從來の敎理を信じ、敎權を重んじつゝあるにせよ、それによりて慰安を得、心の動搖を感ぜざるに於ては、何を苦しんでか又批評す

抑も宗教改革の起るは、決して其根本よりの改造に非ず。清新なる信仰の泉が、星移り物更るに從て、腐敗し、糜爛するに至りて、人心の要求に應ずる能はず、宗教本來の役目を行ふを得ず、茲に於てか自ら信する篤く、他の盲從爲すなきの徒を見て、憐愍の情禁する能はざるもの、立ちて民心に覺醒を興へ、宗祖當初の新信仰に還らしめんとするなり。新信仰とは、決して新たに天より下れるものにも、又地より湧き出せるものにも非ず。是れ宗教が他の學術文藝に對して、所謂進歩と稱すべきもの、存せざる所以なり。即ち宗教は、其外形若しくは外延に於てこそ、種々の變化を有すと雖も、其内容は常に變化なき同一のものなるなり。

第一の問題に對する余輩の解決は次の如くに云ひ得べし。人生問題に逢着し、宗教の第一義に接觸したるものには、批評的研究は許さるべしと。而して其微細なる儀式制度等の特徴は、其人々のキャラクターより來るものなれども、成るべく教祖の定めたる所に從ふをよしとす。然れども此等はこゝに論ずべき程の事にあらず。

(未完)

宗教と論ず

勝水淳行

宗教は其形式上より曰へば、社會的現象に屬し、其の實質より曰へば心理的現象の一として扱ふとを得、今少しく之を

論せん、

一 心理的現象としての宗教

心理的現象としての宗教は蓋し吾人の精神に於て絶對的實在を認め此れに憑依し満足せんとする「人と實在との關係」過程なり、換言せば絶對的實在に向つて欲求する吾人の宗教的意識其の者なり今、少しく之れに就て論ずる所あらん。

既にそれ宗教は人と神或は佛との關係なり、而して人は宗教的主體にして神或は佛は宗教的客體なり、茲に神或は佛とは假名にして超人的絶對無限の實在を意味するなり。

吾人は此の主體が客體に向つて發する意識を呼んで宗教的意識と云ひ、又其の欲求的狀態を名けて宗教的關係と云ふ。

此の如く吾人宗教的主體は充分其の欲求を満足さするに適切なりと認識せば、それを信賴して其の客體の神佛何れなるを問はざるなり、故に今宗教的意識に就て一言之れを曰へば、主體は知によつて客體を認識し、情によつて之れを感得し、意によつて之れを信仰し之れを交渉せんとするものなり。

由是觀之、宗教は吾人の心理的現象にして、其の現象は吾人の知情意全體に洩れる現象なり。抑も吾人の精神は何故に此の如き欲求を有するや、又何故に欲求の満足を要するや、之知らざるべからざる問題なり。

吾人の精神上には意志的作用として種々の欲求を有す、欲求に肉體的なるあり、精神的なるあり、而して欲求の最も根

本的なるものは自己の保存欲なり、然るに吾人は日日衰老を見、死亡を賭る、死は一切の萬事休す、而して吾人又日々之れに向つて進みつゝあり、之れを避けんとするも到底如何ともする能はざるを感ず、茲に於て吾人は自己保存欲の頭尾破壊せらるゝを思ひ、如何にかして之れを全うせんと欲するなり、而かもうは遂に自己にては自己を保存せんと不可能なるを思ひ、吾人は到底自然の大法に可配せられざるべからざるを感ずるに至る、宗教的欲求茲に起り來たる、そは文明人と雖も野蠻人と雖も規一なり、只だ知識の程度によつて高下の別あるのみ實質に至つては少し差之れなきなり。欲求ありて満足なくんば之れ苦痛なり、而して是は遂に恐怖なり如何にかして之れを脱せんとするは吾人の天性なり、此に於てか必然、宗教的關係起り來たる。

既にそれ宗教は自己保存なる實際的欲求より來りて、茲に宗教的欲求となりしものなり、而して宗教的欲求は死生、運命に關する重大なる、事實問題なり。解決せられず、満足せられずして何ぞ止むを得ん、即ち吾人は茲に絶對無限の實在を觀じ、超人的勢力者を認め之れを信仰し、之れによつて死生の大問題を解決し、其の欲求の満足を得んとするなり。かくして宗教は心理的現象なり、宗教的意識の満足なり、然り而して宗教は人に必然的現象なり。其の形式の可と不可とは偏へに知識の程度による、然れども内容に至りては同じく之

れ宗教的意識の欲求なり、其の關係に外ならず。今一言之れを約せば宗教は根底を意識の上に置き主體と客體との關係にして意識の三作用に洩れる必然的現象なり。

二 社會的現象としての宗教

社會的現象としての宗教は蓋し宗教的意識の發して人文史上に活動し、社會發達の過程に屬する社會的現象なり。

故に宗教は社會の東西に由つて異なり、世の古今に隨て其の規を異にす、即ち基督教は白人社會に傳播し、佛教は多く黃人社會に弘流し、古人は淺薄なる怪異神話を信じ、今人は健全なる心理的基礎の上に築かれたる信仰を欲するが如き之れなり。而して社會的現象としての宗教は他の諸種の社會的現象と相關連す、即ち信仰的理想に違せん爲め善惡の思想に就て倫理現象と關聯し、其の活動する團體なる點に於て國家と關係し、其の生死なる事實問題を解決せんが爲め、他の凡ての實際的現象と關係し、又其の熾盛なる宗教的意識の結果として教育現象と密接なる關係を有す。是れ宗教は社會全般の人類に必然なる事項なればなり。今少しく之等に就て論ずる所あらん。

倫理と宗教との關係。倫理と宗教とは最も密接なる關係を有する者にして、時に或は同一視せらるるとさへあり、西歐の碩學カントの如きは實に倫理と宗教とを同視せるものなり即ち氏以爲へらく、

宗教は其の事柄内容に於て道徳と異なる者にあらず、宗教上善人の爲すべき者とせらる、事柄は、道徳上善人の爲すべきものとせらる、とこそ、別なる者にあらず、約言すれば道徳を行ふこと云ふと是れ取りも直さず宗教の内容なり。(大西氏著、西洋哲學史による)

と、カントは即ち宗教を以て道徳を助くる爲めの者とせり、此の意要するに宗教と倫理とを同一視せしものなり。此の如く宗教と倫理とは密接なる關係を有するものにして共に勸善懲惡の點に於て最もよく一致す、爾かれども宗教は人と實在との關係にして、倫理は人と人との關係なり、換言せば倫理は相對的にして宗教は絕對的事項を取り扱ふ、之れ異點なり。

即ち倫理は各人相互の間に於ける行爲動作を規定し、活動して意志を貫徹し、人格を完成し、大我を發揮せんとを理想とし、社會を改善せんとする現象なり。爾かれども宗教は其の善の根底を客體に置き、客體に憧憬し、之れを信仰し、其信仰によつて善を教へ徳を養ひ、超然として生死の外に晏然たらしめんとする現象なり。即ち倫理上にて教ふるは相對的にして、宗教は絕對的善を説かんしす。然れども宗教は實際問題なり、修養として又實踐的善を強ふ、此の點に於て宗教と倫理と相關係す、換言せば宗教は倫理を透して絕對善に達せんとするなり、此の意味に於て宗教は善以上の善道徳以上の道徳と云ふべきなり、今一言約して之れを終らん。

宗教は相對的關係にのみ満足すると克はずして超人的に客體を認め、之れを信仰し之れによつて相對的倫理關係をも解決せんとするものなり、即ち信仰的理想——絕對善の境に達せん爲め、其の修養として茲に實踐的善を奨む、此の點倫理と宗教と相關係する處なり (未完)

京都教壇論

縦 横 生

日本佛教史を釋ぬるものは、平安の佛教全盛期を知らざるべからず、平安佛教の全盛期を知るものは、京都教壇の古今を想はざるべからず、而して京都教壇を回想するものは、足利時代日蓮門徒の全盛期を回想せざるべからず、

當時教壇文壇の異彩を放ちたる所謂五山の碩學は、遠く人煙を避けて、東山の麓、嵯峨野の奥に籠居し、徒に誦經三昧に耽るの時、花巷銀街の中に、堂塔伽藍を半空に聳かして、薨を列ぬる廿一箇本寺あり、金碧粲然として轉た法華の靈徳を感せしめにき、想ふに天文法亂以前に於ける京都日蓮宗は、歴史上空前の盛況を呈したるときにして、凡てに於ける日蓮宗の發達も亦此時にありし也、

然れども變轉極りなき世は、天文法亂後所謂廿一箇本寺を奪つて、洛陽の日宗轉た寂寞たるものありき、其の後十六箇復古の革命は起れり、洛陽の勝地は忽焉として修羅場と化し血雨暗澹として、兵燹到るところに起り、洛陽の七分は殆ど兵火に罹りたり、幸にして禪淨土真言の如きは、多く山中にあるを以て兵火を免るゝを得たりと雖も、日宗の如きは、商家櫛比の中にありしを以て、十六箇本寺中罹災を免れしもの僅かに四五に過ぎず、古より財政の窮迫を以て名ある日宗の此の打撃は實に大なるものたる也、

京都寺院の多くは本寺にして、全國に末寺末山を有し以て纒かに其の財政充實を計れり、然るに維新以後、彼れ等が財源とせる僧官任免を司る宗務院の多くが東京に移らざるべからざるに至れるを以て、寺院舊觀の恢復と共に、洛陽佛教は先づ財政的に破れんとせり、而して更に大なる打撃は此の多忙なる教壇に向つて放たれたり、社會の進歩政治的變遷は、一般思想上に大なる變化を來し、近世西歐思想の輸入は、科學的進歩を生みて、今や舊佛教は全く社會的死滅を宣言せられんとす、洛陽教壇の頽頹繁多なる敢て多言を要せざる也、

されば洛陽教壇に向かつて、少なくとも振興の策を供せんとならば、先づ財政の充實を圖り、次で一般思想と醇化せざるべからず、然れども、こゝに最も困難なる問題は所謂京都人士の京都的思想是也、

京都人士に對しては世既に定評あり、吾人こゝに敢て多言を要せざるべし、唯だ吾人が順序として叙せざるべからざる

本寺の改築せらるゝや、寂寞たる教壇は稍々舊に復し、以て再び陽春の候を俟たんとせり、然り而して徳川氏の御馳走略は、浮華輾弱、所謂法華的氣概を失はしめて、洛陽教壇の寂寥を復た感せしむるに至りぬ、
由來洛陽の教壇は、憾軻不遇の境に立てり、春は來り春は去り、夏は來り夏は去り、秋は來り冬は來り、來つ途に去り去るものは去り、來るものは來らず、

明治維新の奠都は更に洛陽教壇の不遇を啣たしめたり、洛陽は遂に舊都となり、徒に古刹の壯觀を夢み、舊佛教に惚るゝ、圓顯如來の道路織るが如きに逢遭するあるのみ、嗚呼、洛陽教壇は竟に死せる乎、

古來政治の變遷は教壇に向かつて常に刷新を促すもの也、奈良朝佛教は、平安遷都によりて亡び、平安の全盛も鎌倉幕府の起るに及んで鎌倉佛教の勃興を見るに至り、鎌倉の教壇又室町の覇によりて振はず、

維新の奠都亦洛陽の佛教界は、徳川幕府の滅亡と、主上東遷の變遷により、茲に全く政治的中心を失ひぬ、是れ既に大なる打撃なりし也、而かも打撃は是のみにして止まず、維新當時の京都は實に慘狀を極めたり、徳川氏の勤王黨を滅せしめんとするや、京都警衛は最も嚴重を極めて、猥りに洛中の出入を禁せり、然れども勤王討幕の機運は愈々熱しぬ、王政

は、浮薄巧辨にして自大不遜なること是也、而かも亦是れに加ふるに、利に敏く義に鈍きことにして、其の物に執着心多く、一とたび握らば袖から手を出すも嫌や也と移して以て京都人士を評するに足らん乎、されば京都人は一般に消極的也彼等は何時までも都會時代を夢みて、世と推移することを知らず、少しく進取的積極的のことあらば隣人相議して共に伍するを好まず、されば彼等の理想は何處まで舊思想の擁護者となりて、所謂都會式京都を保存せんとするにあり、

此の如く京都人の一般は舊守的退嬰的なるを以て、教界にありても京都を相手として起たんとならば、勢ひ舊守的退嬰的なる舊佛教の愛護者たらざるべからず、然らざれば京都人士の嫌惡を來して、京都教壇は先づ財政的に死せざるべからず、然れども茲に更に困難なる問題は宗教々田の開拓を目的とするものは、一般的ならざるべからざることも也、宗教は決して特殊の場合に於て特殊の宗教が成立するものにあらざるべし、否な唯骨董的宗教は何等をも社會に貢獻せずして、特殊的に成立せんも、時代に背馳せるものは、遂に一般的に死滅を來たさしめらるべし、

されば宗教は最も一般的にして、社會思想と順應するを要すべき也、而して是れ實に洛陽教壇の今日尤も難問題とするところ也、何とならば、京都人士の意向を迎へなば、勢ひ退嬰的守舊的舊佛教たらざるべからず、一般思想に順應せば進

歩的、活動的、新佛教たらざるべからず、而して前者に迎合すれば後者に破られ、後者に應ずれば前者に覆せらる、然れども前者に破らるゝは、眼前のことにして、後者に破らるゝは、稍々知慮ありて後也、こゝに於て、洛陽教壇は實に前者に迎合して、今や京都的孤立教壇を見んとす、金風枝を拂ふもの豈に高雄嵐峽の夜嵐のみならんや

大観出

小久遠陀羅尼

覆面冠者

其五

さて其夜の羽佐間經應は嬉しさ喜ばしさの情に充ちて、往生院へ歸りぬ、さるにても、澄子が此金の出處は何處なるべきとは、羽佐間が絶へず胸の内にくり返して考へたる謎にして漸くにして解き得たと思ふは、澄子には故父よりもらひ受けし公債證書ありとの噂、曾てありしが、若やそれらを彼此せしにはあらずやとの考も起りき

明日は妹の静子を引取ねばならぬ日なり、母の芳子はそれのみに心奪はれて、今日も廣小路へ車を走らせなせり

まらし其日は來りぬ、妹は母と母とに伴はれて往生院へ歸り來りぬ、三十路をとくすきて四十路に今一二年あると思ふ丈のすらりとしたる顔のや、長き方の、黒縮緬の羽織に龜甲

の浮紋のある織物の帯したる女は、うれし静子が今までの母なり、それに續くは静子、羽佐間には何とは知らぬ、赤き色黒き色、ねずみ色、桃色、とりませたる色のうつくしき衣服は静子がや、圓るき顔の、丈低からぬ姿に程よくうつりて、見るからに懐しき思ひは生ずるなり、母は其處此處をかけまわりて、二人の newcomer をもてなしつ

程程先なる母は歸りつ、一家は忽ち寂どしたり、母と經應と静子と一つの火鉢をとりまきて暫し無言なりき

「静子お前家へ歸へつて寂しいかい」

「いゝもうね、萎しうれしくつて、嬉しくつてならないわ」

「うらかい御母様もね、こんな嬉しい事はない、能く兄さんに御禮をお言ひ、兄さんの心配は一通では無かつたんだよ」

静子は今更ながら兄經應の顔を注視して、立派なる兄様よと覺へつ、更にかく能き兄様ありと知らざりしを悔ひつ

「兄様、どうもいろ／＼御心配かけてすみません」

「静さんまあ歸つて好かつたね、御母様がねひそく御心配なすつたもんだから僕も一生懸命になつて行働んですよ」

「難有う御座います」

「ほんとうに、まあ、好器量の娘になつたね」

「まあ御母様、兄様の前で」

「兄様の前だつて好ぢやないか」

「おは、」

「は、」

こは經應か笑なりき

「さあ、もう、日が没る時分です、經應も静子も御佛前へ御進みなさい、御母様も共に參ります、母子三人が如來様や故父様に互ひに無事の御禮を申し上なければなりません、さあ經應、静子、はやく」

二人は異議なく佛前に跪きつ、母の芳子も共に參りて念する聲は暫し絶へざりき、

其翌日、母の芳子は本所に伯父なる人を訪ひ、まだ一二軒訪ふ所ありといひて出てゆきぬ、

澄子は如何にせしか、澄子は如何にせしかとは、羽佐間經應が昨日今日思ひ惱める處なり、今朝入湯の歸りに白蓮寺の婢お高に逢ひて、澄子さんはときけば、田舎へ御出になりましたといひしが、さては亦氣分勝れずして轉地療養にても出でしか、繼母の家庭の美しくからぬにつけ、結句、山川草木の間に身を委ねて、氣を放つは澄子の爲に良策なり、妹の事に就て一方ならぬ心配をかけし澄子に、其妹を引達さて別れしは、名残多き事なるよ、今日かく吾等母子三人が、太平無事なるも、思へば澄子の力なるよ、母は知り給はじ、妹は勿論知らじな、され吾獨り知れるなり、澄子が吾に對しての誠をこめたる行爲は、今吾等母子三人の間に温かき平和の春を捧げつゝあるなり、げに田舎へ往きたりしか、

「これは経磨が机に向ひて、書籍も繕かての思ひなり、

「兄様」

「お、静様」

「何を思つて居らしつて」

「何も思はない」

「虚よ」

見れば静子は、何か盆にのせて持てるなり、

「静さん御馳走」

「此を御母様が午後になつたら、兄様に呈よつていいひなすつて」

「それは御馳走様」

見ればそれは林檎なり、澄子が送りし林檎なり、

「妾しが刺ませう、」

「大きいのね」

静子は町家に育ちてや、俠なる方なり、言詞、態度、何事に依らず、少しやりすぎはせずと思ひつ、されど其心に悪の氣、毒の氣はなかりき、すべて虚偽をしりぞけ、偽善を却ける風ありき、好き兄様、立派なる兄様を持ちて、静子はやゝ世に對して誇る色あると共に、兄に對しては敬ふといふよりは、むしろ親しまんとせり、

「兄様割りませうか、

「あア」

経磨は書籍に注ぎたる眼を暫し静子の方に向けつ、

「お前も一つどうか」

「頂きませう兄様これ買つて」

「いや到来品さ」

「何處から」

「お向側から」

「うう、お向側には美しい御嬢様があるつて、ほんと、」

「誰れから聞いた、」

「御母様が、今朝おいひなすつてよ、」

「あるさ」

「そう」

時計は五時を報じたり、やがて母を載せたる車は歸り來たりぬ、其夜母の芳子は経磨と静子との二人を奥の間深く呼びて、容と言葉とを改めて説き出しぬ、

「今御母様が此處に御出なさる故父様の御位牌と並んで、お前達二人に話す事がある、能くきいてもらはねばなりません、静を一歳の時に外へ遣りましたのは、唯先方が欲いといふた計りでは御座いませぬ、内にまだ深い事情があつたのです、それは其時在つた経磨と、ともに故父様がさる友人の死亡の後の借金を引受けられました爲に、何分家庭が不如意續きして、それや、これやが、原因でつひ請はるゝまゝに静を外へ遣りました、故父様が引受けられましたのは借金ばかりで

はないので、其時生れた計りの男の兒も引取りました、尤も其友人といふのも遠縁ではあつたのであるし、父母ともに不幸にして死んでしまつて後は借金と生れた計りの男の兒丈でした、幸ひ籍も決つて居なかつて、それで妾しの生んだ子にして届けたのが、経磨お前です、」

経磨の驚きはいふも更、静子も俱に驚けり、

「故父様は経磨の方を遣れとおいひなすたけれど、此は男です、男でなくつては世の中へ出せませぬ、同じ育てるなら男を育てた方が好う御座んすと、御母様が斯ういひ切つて経磨を育てたんです、其時御母様が静を手離すのも可愛相であつたけれど、一旦故父様にいひ切つた事ではあるし、男が欲しいつて始終二人して言ふて居つた時だから、遂にそれに決定たんです、静、お恨みてないよ、

経磨は故父と母の慈悲に泣けり、

「御母様、始めて聞いた吾身の上、今迄のお慈悲おろそかには思ひませぬ、僕ア、今まで知らなかつた、御母様勘忍してくださる、」

「兄様の御身の上が判るにつけてまして妾の元も判りまして、御母様、難有ふ御座います、ね恨み申す處では御座いませぬ、妾が女に生れたのが不肖なんて御座います、」

「どうせ一度はいはねばならぬ事柄なんですから、それをいふてしまへば御母様も一つ安心をしたのです、それをいふて

経磨がろれほぎに、故父様や御母様の苦心を思つてくれれば御母様は却てうれしい、経磨、お前御母様の從來の心盡しは嬉しいか、」

「はう、」

「静、お前、今となつて見れば嬉しいだらふね、」

「はい」

「御母様も嬉しい」

一座の三人は泣きぬ

芳子はやがて、亦言詞を正ふして、

「二人の身の上が判然すれば別にまだいふ事があるんです、お前達二人で此寺を相續して貰はねばなりません、これは御母様の獨斷ではありませぬ、故父様の御遺言で其時の證人は本所の伯父の妻です、今日本所へ往たのもそれです、此間のね金だつて伯父がこういふ意味からいへば、一番心配しなければならぬんですがね」

「まだ若いお前達にこういふ事をきめ附ていふのも、如何かと思ふがね、二人とも清浄な内にどうか決定て置きたいんでね、今の御本山でも大層お前に望みを屬けて居らしやる様だし、何か近々事業をお始め爲さる噂もあるし、そうすればお前の身軀も忙がしく成るだらふし、ううして又心の狂はなれどもな、是非ね、今の内に決定て置き度、妾しは思ふがね、」

芳子は諄々として説きたてたり、経磨も静子も亦もや意外の感に襲はれたり、

お、げにうれよ、故父と母とが實の子たる静子を第二にしてまでも、吾を育て給ひし、海よりも、山よりも、高き深き御恩は、報ゆるに時ありとすれば、今なるか、母の言詞はげに道理なり、互ひに子として育てたるものに、家督相續を命ずるは道理なり、されど結婚、こはゆゑしき大事なり、唯一の親の恩は血に沸きかへる若き子の愛の自由をまて、抑制するの權能をもてるか、さなり、吾は愛の自由を叫びて其叫びに應ずる愛の對象あるべきか、そは終に如何なるべき、

「経磨」

芳子は、嚴然として呼びぬ、

「返詞をなせしませぬ、」

「は、」

「返詞のないのは不承知か」

「それ、」

「明白にお言ひなせ、」

「何事も御母様の仰せに随ひます」

「静子お前は」

「どうぞ御母様、兄様のよろしい様に、」

母の芳子は喜びつゝ、其夜の夢は安かりき、

正月の一日は、お芽出たいたのですが、その晩から一年の計が出来ねばならぬ勘定です、一日の計は朝にあるが如く一年の良計は、この時なのである様です、一年の計は穀を植へ、十年の計は樹を植へ、終身の計は人を植うるにありと、管仲とか云ふ人が、申てるそなたですが、應用せば随分面白うありましよう乎

雑報

▲日宗青年會の義舉 趣旨左の如し

東北饑饉救恤趣旨

宮城福島磐手三縣下の民今方に飢に死なんとするは各新聞紙上に於て江湖の既知りたまふ所にして世は凱旋歓迎に狂して之が救済の實未だ擧らず是に於てか生等胥謀り冬期休課の機を利用して此窮民を救はむことを企たり

経磨の愛に對する平生の持論は、終に空想となりぬ、経磨は終に世の絆しをきる事能はざりき、

婚禮の日は母と伯父と経磨との間に定まりぬ、

静子は餘り物いはずなりぬ、されど何とはなしに、そはそはしつ、

金の必要に應せざりし伯父は、どの顔下げて来るべき、今経磨と結婚する静子を、埃及より救ひ出せし澄子は如何にせしや、

終に婚禮の日は來りぬ、

新年の辭

容 廣 坊

サア又新らしき年を迎へました、處てお目出たいには相違ないが、あまりお芽出た過ぎると、どうも一年中の良計を失ふ様に思はれます

全躰私なんぞの考へては、ほんとにお目出たいのは、正月の一日から、迎ふ目の前の月日でなく、背後即ち昨一年中をかへりみてので、ありましよう

先年中は、まづお互の第一の實を生命を全ふじ、信心も大に進み、隨て修行の数も多く、又各自の業務も結了し、やり取も一どまらず済まし、家内中が打ち揃ふて、越年したので、やれ／＼お目出度といふのでしよう

を共にする能はず飢に泣く子を脊にして凱旋の夫を迎へ勇士を勇人に食なく衣なし加ふるに今後降雪の期に向ひ彼等窮民は如何にして其生命を保持し得べきや況や町村費缺乏の爲め小學校を閉鎖するの止むを得ざるあるに於てをやこれ生等の聲を大にして以て江湖の憐みを請ふ所以なり冀くは大方仁人生等の微衷を諒とせられて一滴同情の涙を垂れ以て此窮民を救済せられむことを

▲千葉縣山武郡豊成村十四部洛村民戦死者追悼招魂祭

願本法華宗各教區に於ては日露事ありて以來各寺院順次戦捷の新機會に餘念なかりしが本年十月平和克復の大詔あらせられしに基き陸海軍の凱旋を歓迎すると同時村民各委員は各團體と協力し十二月十七日を以て本村宮區蓮成寺に於て戦死病歿者追悼大法會を舉行せり△式場は蓮成寺本堂正面の中庭に於て丈け貳間有半の大塔婆に備三十七八年役戦死病歿之忠魂英靈と標榜し嚴かなる祭壇諸般の設備は前日より作られ當日式の正導師は同宗々會議長中村僧都副導師池澤澤庵玄長谷川日得堀江誠一松井道安の諸師其他各寺院住職の出席ありて大法會を修し式中捧讀せる祭文弔辭は當第三部寺院住職總代池澤澤庵玄師の追弔文第七教區寺院總代管事龜崎日憲師の弔辭豊成村佐瀬清兵衛君の祭辭行方山武郡長の祭文衆議院議員板倉中君の弔辭特に當村招魂祭を傳聞せられたる陸軍大臣秘書官よりは豊成村青年特志團體總代佐瀬清一君宛にて一キッセンセンシヤセウコンノサイランニサイシハルカニシントウナルチヨウ・ヲヒョウニス」との弔電あり豊成村會議員總代鈴木賢治郎君の殉難者ヲ祭ル文豊成村農會員總代霞英一の追弔ノ辭豊成村音楽隊總代戸田幸君の弔詞等ありて前後に三浦名區及び堀之内區關内區共榮音楽隊特志奉納の奏樂を以て行列の迎送等に至誠を加へて大盛典を極め村青年會の特志に成れる餘興數種あり朝來午前五時打揚煙火の一發は村内各部面に當日の吊

意を一際にせん事を示し式の終點に至るまで數百發を打揚げ
 其他宮區中野區上武射田區各部落聯合にて六頭の古代獅子を
 大舞臺に舞はしめ舞方には凱旋軍人の親しく新意匠の妙技を
 凝し頗る勇壯なる武威を舞ひ現はせるあり外に六代目都川車
 龍氏師弟の語り祭文并に三浦名鈴木伊兵衛氏外數名の義太夫
 等各特志の奉納になれるものありて各遺族は特に萬般の慰籍
 を受け村民其他參拜者は場の内外に滿ち式後各會員には別に
 設けたる會場に於て折詰清酌の饗ありて偏に同情の吊意を盡
 せり翌十八日は早天より佐瀬豊成村長土屋其他の吏員數名連
 成寺に集合し部内寺院住職一同と共に各部内出身戦死者の各
 墓前に配布すべき塔婆供養の爲め參向し貳個音樂隊の奉納行
 奏を先導として順次慎重なる大法味を供せり各遺族は此周到
 なる慕參追吊を受けたる戦死者の光榮あるを喜び遺憾なく謝
 辭を述べられ一同は巡參し終りて蓮成寺に引上たるは午後點燈
 頃にて直に本式場なる大塔婆を豫て指定の地域に移立して總
 供養をなし完く本會を決せり因に記す斯る上下の用意に成
 れる村區追悼會は未だ聞かざる事なれば何れも各町村には身
 を以國民を代表し犠牲となれる戦死者諸君に對しては出來得
 る限り厚意の追吊あるは吾人國民の本分なり其遺族者一人報

▲夏目蓮水氏の書簡 左の如き題目にて北總より來る
 平和第一年後に於ける敎家の覺悟 露と覺端を開きてより茲
 に三星霜戰捷に戰捷を重ね今や平和の第一年に入りぬ我が帝
 國交戰の第一義は文明を平和に求むるにありしことは其宣戰
 の詔勅に垂示し給ひし處の如し我帝國の利權は平和の確保に
 あり故に露と交戰の止むなきに至りしは平和の要求に外なら
 ず而して平和の新年に於て吾人敎家は何をなすべき乎請ふ試
 に之を述べん
 交戰の上に於て偉大なる効果を収しは物質的要素と精神的要
 素との合同調和にあり物質的要素即ち形而下の攻究發達は之
 を外に求め内に之を究むるを得べし而して精神的要素は平素

其分に應し各盡す處ありと雖も其布敎方法たる餘りに形式に
 流る、嫌なしとせず切言せば其布敎傳道の聲が中流以上の人
 士の耳に入る少なきを遺憾とす實に中流人士は國家の生命な
 り吾人は此の人士に對つて立正安國の大義を説き其論議の骨
 髓を移殖するは平和第一年後に於ける吾人敎家の第一要素な
 りと信じ聊か茲に所感を述べ
 ▲貯金の勧め歌懸賞募集 拜啓時下秋冷の候益御清
 榮奉慶賀候後貯蓄思想涵養の一助にも可相成と存左記の
 通り貯金の勧め歌懸賞募集の上當撰の歌は作譜を請ひ一般童
 幼の唱歌等にも供し度候條御繁用中恐縮奉存候得共御匿名に
 ても宜しく御座候間何卒國家の爲め御詠出を請ひ併せて御氣
 付の向へ御勸誘を得多數應募好果を奏し候様御風翼を仰ぎ度
 此段相願候勿々敬具
 明治三十八年十月十三日 肥前唐津郵便局長 山村直太

懸賞募集廣告
 一題 貯金の勧め歌 一文体 新体詩
 一字数 貳百四十字以内 一締切期限 明治三十九年五月末日
 賞品 一等 金側懷中時計 壹箇 二等 銀側懷中時計 壹箇
 三等 据時計 壹箇

一懸賞當撰の歌は斯道知名の士に作譜を請ひ唱歌として一般
 貯蓄思想涵養の資料に供すべし
 一答案は肥前唐津郵便局内山村直太宛の事但答案接受の上は
 即時領收の證を發す
 一當撰發表は締切期限より二ヶ月以内とす
 明治治三十八年十月廿三日 肥前唐津郵便局長 山村直太
 ◎參考 貯金新金言懸賞募集當撰披露
 過般貯金新金言懸賞募集の處應募總數四千三百二十五通に達
 し其撰擇方を法學士石橋忍月君法學士川村竹治君文士三根
 圓次郎君に依頼せしに左の通り撰擇せられたり

之を修養するを要す露の陸海軍に對し我が陸海軍が威力を逞
 し千古未曾有の捷利を得しは至尊の稜威に出でたるは喋々す
 る迄もなしなれど又其將卒の雄圖國民の聲援が多大の効果を
 與へしは世界に比類なき精神的要素の活躍に外ならず精神的
 要素の修養之れ我が帝國が世界に雄視するの所以にして我
 が帝國の生命なり精神的要素とは何ぞ日本魂の發揚即ち之れ
 精神的要素の修養換言すれば愛國心の育成即ち之れなり陸海
 軍屯營艦船内に於ける精神教育に就ては當路其人あり吾人敎
 家として敢て容喙すべきにあらざる然れども戦士は背後に於け
 る聲援即ち國民の精神的動作に就ては其消長實に吾人敎家の
 双肩に懸る大責任なりとす

三十七八年戰役後に於ける國民の敵愾心が出征將卒に多大の
 聲援を與へしは今更ら喋々するまでもなしなれど其敵愾心の
 勃興たる平素の修養にあらざるんば時に當つて多大の光輝を發
 揚すべきにあらざる蓋し一張一弛は世變に於て免るべからざる
 の事態に属す試に思へ元龜天正の頃に當つて天下を平定せし
 彼の三河武士の子孫の元氣も元祿享保時代に至つては著しく
 萎靡衰頹したるにあらざるや吾人をして忌憚なく之を言はしめ
 ば或る部分に唱ふる我が國民の敵愾心は領國主義の結果も又
 其一原因にありとの議論も穴勝ちに排斥すべきにあらざる現に
 布哇若しくは米國に出稼するものの子女にして些とも邦語を
 解せざるものさへあり之れ等の小國民の將來に就て考察すれ
 ば渠等は其本國の國況に浴したること少なき國民なり其愛國
 の至情に於て遺憾あるは蓋し免れざるの數ならん是れ等國民
 の多くが其本國に歸來し難居するに當つては其道徳心が世道
 に影響すべきは遠き未來にあらざるべし加之るに一張一弛は
 世變に免る能はざるの數なりとすれば戰捷後に於て有り勝ち
 なる人心の弛廢を憂ふるは必ずしも杞人の憂にあらざるなり
 俗俚言ふ勝つて兜の緒を占めよと戰後人心の弛廢を振揮せし
 むるは實に吾人敎家の任なり於茲乎吾宗布敎の方法を見るに

明治卅六年五月十五日 唐津郵便局 山村 直太
 壹等賞 取る思案より遺はぬ思案 佐賀縣神崎町 松尾 正君
 貳等賞 貯金の金とて別には無む 佐賀縣三養基郡基山小學校 島 とら子君
 參等賞 溜めて溜らぬためしなし 群馬縣佐波郡豊受小學校 佐々木清松君
 貯金は義理の借金と思へ 佐賀縣西松浦郡波多津村 天野房太郎君
 多く取るより少しく残せ 長崎縣西彼杵郡三重村 東 清七君
 貯金の家に饑饉なし 佐賀縣神崎郡千歳小學校 深川 忠次君
 五厘の切手も積めば千兩の手形なり 長崎縣嚴原田淵町 土井 春雨君

▲先更會の講演 たる十二月八日池の端妙顯寺に於て講
 演會を開き講師本多日生師は多忙を排して出席せられ予の法
 華經觀なる題にて約三時間に亘る講演あり門下知名の士及び
 大學及哲學館在學の學生數十名聽講せり散會せしは午後五時
 んとし第一に時々出版を公にし宗教上の論文及び講演書葉書
 等を出版し又祖書研究會を起して注法華經を研究標準として
 從來の祖書に附帶せし俗解を排し眞の信仰的研究に着手すべ
 く又講演會を擴張して普通學校にて開かれぬ特殊の宗教哲學
 に關する名士の講演を開くべしといふ

▲「予の法華經觀」の出版 先更會講師本多日生師の講
 演を論文体にして叙述せしもの師が近來の創見的講演なれば
 内外宗教家は争ふて購讀を申込みり
 ▲故陸軍大尉正七位吉田仲太郎氏の隊葬
 一明治三十九年一月七日豊橋第十八聯隊偕行社より出棺陸軍

墓地に於て葬儀執行大導師大僧正牧田日蔭、副導師僧都石塚日縁、僧白井日慶、衆僧八人、各宗會葬凡三十人
 一會葬者の重立 第十七旅團長、第十八聯隊補充大隊長岡大佐を始將校數十人、愛知縣知事深野一三、渥美郡長、濱名郡長、吉津村長、同村會議員、學校職員等
 一法要 一讀經方便、二讚鉢、三管長吊詞石塚代讀、四吊祭文白井代讀、五引導大導師、七久遠偈、八退席
 一管長詞吊 本宗信徒陸軍歩兵大尉正七位吉田仲太郎君
 征露の役に従ひ所々に轉戦し各偉功を奏し忝も感狀を賜はり光榮とす不圖二豎に侵され沙河鎮於て溘逝せられたりと聽く茲に本門開顯の妙旨を以て冥福を修し忝く吊詞を靈前に呈して哀悼の意を表す
 明治卅九年一月七日 顯本法華宗管長大僧正 本多日生

一感狀之寫 歩兵第十八聯隊陸軍歩兵中尉 吉田仲太郎
 右者明治三十七年六月十四日十五日得利寺附近の戦闘に於て所屬大隊右翼に在る我下士哨に向ひ突撃し來る數百名の敵に對して側面より之を猛射し其後續部隊を潰亂せしめ又退却せる敵兵に對して一齋射撃を行ひ其駕馬と砲手とを啗し敵をして火砲及彈藥車を委棄するの己むを得ざるに至らしめたり八月廿八日鞍山站北方八掛溝附近戦闘の際に於ては左側衛司令として優勢なる敵を撃退し八東家子東方高地を占領せり八月三十日首山堡附近戦闘の際同夜向陽寺東方高地に於て將校斥候として敵陳地前の地形及副防禦の景況を偵察し以て聯隊の進路を決定せしめ大隊の突撃を實施するに方りては搜兵長として其任務を達成し敵の堡壘を奪取するや敵の銃砲火集注し我死傷相踵き其身亦負傷するも屈せず泰然として其位置を固守し遂に敵をして全陣地を放棄するの己むを得ざるに至らしめたり仍て感狀を授與す
 明治三十七年九月六日 第二軍司令官男爵 奧 保鞏

福嶋宮饑饉救済に付義捐募集
 城岩手饑饉の慘狀は新聞紙に依て報道せられ既に一般人東北三縣下饑饉の慘狀は新聞紙に依て報道せられ既に一般人士の知悉せらるゝ所なり而も其慘狀は吾人想像の外に出ても甚しきに至りては米穀の收穫皆無にして中流以下の人々は草木の葉又は樗の實等を以つて僅に飢を凌ぎ漸く其生命を維持するに過ぎず今や時正に嚴寒に際し降雪連日食の求むる處なく徒らに死を待つの状態にして各地方廳之が救済に力を盡せりと雖も而も尙ほ其手及ばずして困憊死に至るもの頻々として相次げりと言ふ之を聞いて黙過するは同胞の情忍びざるなり佛陀大悲の洪範を宣傳せる本團は茲に同情に厚き諸氏に訴へ金錢物品何れに拘らず應分の義捐を稟け之を一括し各地方廳に送付し窮民救助の一端に資せんとす諸氏幸に本團の微衷を酌み多少の義捐あらんことを希ふ
 明治三十九年一月 統一團

- 義捐金領收報告
- 一 義捐は金錢物品何れにても差支なし
 - 一 義捐は三月三十一日を以て切とす
 - 一 義捐は宮城縣を中心として適宜三縣に配分す
 - 一 義捐者の芳名は本紙上に掲げて別に領收證を發せず
- 義捐金領收報告
- | | | | | |
|--------|-----|----|----|---|
| 一 金貳圓也 | 東京市 | 山根 | 顯道 | 殿 |
| 一 金貳圓也 | 全 | 井村 | 恂也 | 殿 |
| 一 金壹圓也 | 全 | 田島 | 義調 | 殿 |
| 一 金壹圓也 | 全 | 山田 | 日廣 | 殿 |
| 一 金壹圓也 | 全 | 井村 | 靜子 | 殿 |
- 小計七圓也

恭賀新年

一月吉旦

先更會

講師 本多 日生
 幹事 國友 文次 耶
 同 古定 賢 正
 同 木村 義 明

恭賀新年

明治三十九年一月一日

總本山妙滿寺

野口 義禪
 銀井 乾升
 鈴木 孝碩
 川崎 英照
 森義 觀

謹賀新年

吉旦

今成 乾隨
 野口 義禪
 井村 恂也
 笹川 眞應
 木村 義明

謹賀新禧

吉旦

錦織 日航
 山岡 會俊
 山根 顯道
 鈴木 學道
 橫溝 日曄

恭賀新年
一月一日

大學林

竹内無着
山名木信
里見圓海
中村乾信
草切榮玉
藤崎通明
秋葉顯正

先更會講師本多日生師述
統一別刊（二月廿五日發行）

六十頁色刷
一部郵税共
金五錢百部
以上一部金
三錢五厘の
割

予の法華經觀

本書は宗門の明星本多日生師が近來の大著法華經講義撰筆の翌日に、師が大著によりて新に發揮せられ、新に明晰にせられたる。法華經觀、佛教觀を聞くべく、特に、本會が乞ひ臨時に開會して、その講演を筆記したる者、更に師の嚴正なる校閲を経て、之を流暢平易なる論文体に書き綴りしものなり。二千頁の大冊二百日の執筆になれる法華經講義の眞髓は實に結晶して本書に現れたり、師の大著を讀まんものも、讀まざるものも、必ず本書を購ふて師が一世に秀てたる大識見に接せよ。

施本用として尤も適當なり、前金にて至急御申込あれ
「統一」讀者にて本書希望の方へは端書にて御申込次第御送付
致候代金は購讀料御送付の節御送付あれ

先更會
東京下谷日暮里二番地

賀正 賀正 賀正 賀正 賀正
恭賀新年 恭賀新年 恭賀新年 恭賀新年 恭賀新年
本行寺 紀野俊耀
北國金澤本多町
不肖儀一昨年五月來旅順及北韓方面に出征中の處昨冬十一月三日無事金澤に凱三仕候依て出征中亦是負傷の際御見舞を添ふせし道兄諸君に謹て謝す

村雲尼公殿下御題字
日蓮宗各派管長序文
大僧正本多日生師著

法華經講義

目次

- ◎序説◎第一章 緒言◎第二章 法華超勝の教義◎第三章 諸種の法華經觀◎第四章 天台の法華經觀◎第一節 三種教相の綱格◎第二節 十雙權實の巧釋◎第三節 六重本迹の主旨◎第四節 三法々牀の解釋◎第五節 待絶二妙の解釋◎第六節 一念三千の妙觀◎第五章 日蓮の法華經觀◎第一節 本化別頭の教相◎第二節 但令用實の活斷◎第三節 應身常住の妙義◎第四節 佛界緣起の妙旨◎第五節 究竟圓慈の活釋◎第六節 聲色爲經の眞義◎第七節 唯一本尊の光顯◎第八節 信念成佛の要道◎第九節 兩善一貫の活論◎第十節 台當教相の異目◎第十一節 身讀法華の壯觀◎第六章 天台講經の要義◎第一節 四教五時の統釋◎第二節 五重玄義の妙解◎第三節 法華釋經の科段◎第四節 悉檀運用の活釋◎第五節 文々四釋の廣解◎第七章 日蓮講經の要義◎第一節 日蓮上人の學風◎第二節 本化獨特の五玄◎第八章 法華傳譯の概略
- ◎釋文◎科段◎來意◎大意◎入題◎文々解釋◎通解◎妙解◎異解◎批判◎質議◎解決◎字義◎參考◎讚唱

妙法華經は佛教教義の帝王なり亞細亞文明の樞軸なり世界群籍の寶典なり古今の哲匠苟も一宗一家を立てしものにして曾て對法華經の見解を有せざりしはなく互に嬋妍を競ふてそが龍賁虎鬪の論戰は實に佛教史上の一異彩なり苟も佛教を知らんとならば須く先づ法華經に來るべし百年大藏に没頭せんよりは一日法華を研鑽するに若かざる也。曾て天台智者釋經に心血を注ぐあり爾後の釋書は言ふに足らず更に日蓮上人は本化別頭の教觀を開示して妙經の統歸を示し給ひぬ。法華を學び法華を轉じ法華を信じ體達せんとするもの佛教の人身觀宇宙觀道德觀佛觀等に就て正知正見を得んとするものは必ずや天台に鑒み日蓮に學ばざるべからずこれ本書の起る所以にして。著者は多年法華經の奥旨を専攻してその學道統を傳へその見稟承あり日蓮上人を忘れたる從來幾多の註書に慊らず即ち廣く三國の諸家を参照しるか蘊蓄の妙義を傾倒して今茲にこの著あり。

和裝映入全八冊紙數凡一千八百頁
定價參圓八拾錢 小包送料貳拾錢
出來期限 明治三十九年四月一日

序説には法華經の研鑽に關する重要な教義を排列して一々之に詳解を下し法華全部の科段に就ては圖示を掲げて一目瞭然たらしめ卷首には品々の要義を抽出し入文解釋には來意釋題綱領に就て記述するのみならず文々句々には一々詳解を施し通解異解、批判、質議、解決、參考、字義、妙解、讚唱等の科を設けて親切丁寧に記述せられたれば深固幽遠無人能到の大寶典もこの著により初めて内外の僧俗を導きて等しく妙處に到らしむるを得ん而かも行文流麗、字句平易、文章通俗にして何人にも解し得らるべく務められたるは著者の意を用ひられし所なり故に本宗僧侶信徒は勿論荷も指を佛教に染むる者は必ず精讀すべきの良書なり。

全發行所

東京市淺草區南松山町
 京都市上京區東洞院
 三條上ル
 東京市京橋區南傳馬町三丁目
 東京市京橋區南傳馬町二丁目
 東京淺草區廣小路
 東京麻布區飯倉町

統 一 團
 村 上 勤 兵 衛 團
 東京荏原郡池上村日宗新報社
 京都木屋町二條貝葉書院
 大阪東區安土町四丁目吉田書店

豫約者諸彦へ謹告

法華經講義出版ノ儀爾來取急キ居候モ著者ノ熱心ナル記述ハ豫定ヨリ増スコト約四百頁ニシテ實ニ一千八百頁餘ノ大著作ト相成リ且一時的ノ著ニアラザレバ四回已上嚴密ナル校正致サレ爲メニ印刷漸ク半ニ至ラズ依テ今回活版所ニ特別ノ方法契約致來ル三月二十日必ズ全部完成十日間製本ニ費スモ全末日發送相成候事ニ取定メ候茲ニ事情ヲ陳ヘ偏ヘニ御寛容ヲ仰ギ候何卒御諒察給ハリ度候敬具

追テ出版發行ニ關スル事務ハ統一團へ御照會相成度候
 明治三十八年
 十二月十五日
發行所 東京市淺草區南松山町
統一團 京都市東洞院三條上ル
村上書肆

恭賀新年

腦脊髓 精神病
帝國腦病院
 東京市神田區和泉町
 (電話下谷 七二七)

東京市神田區和泉町
 (電話下谷 七二七)

院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年専門學研究の爲め勸導へ留學卅六年同大學卒業尙進て英佛専門病院を視察兩院にて診察す

精神病 専門
青山病院
 東京市青山南町
 (電話新橋三六四五)

東京市青山南町
 (電話新橋三六四五)

本郷
眞泉病院
 (電話下谷四三九)

婦人科産科 醫學博士 千葉稔次郎
 醫學士 中島襄吉
 醫學博士 野村華造
 内 科 醫學博士 野村華造

基礎金領收報告

岡山市二日市町
 横山藤吉殿
 一金一圓也
 右御寄附相成正ニ領收候也
 三十九年一月
統一團

一本誌は毎月一圓十五分を以て發行期日とす
 一本誌は一冊六錢 十二冊前六十五錢 郵券代用は一割増價五圓切手可也
 一諸君申込の請は住所姓名を明記して認めらるべし

一頁半	四角一頁	特別廣告
拾圓六圓	三四五拾錢	十五圓ヨリ
廿五圓	廿五圓	廿五圓

明治卅九年一月十五日印刷發行

發行人 井村尚也
 編輯人 山根顯道
 印刷所 鈴木學
 北澤活版所

發行所 統一團
 東京市淺草區南松山町四十五番地



本誌の特色

本誌は全國鐵道の停車場に備置
 きあれば其廣告は全國の公衆一
 般に知らるゝ便宜あり